

第2回東日本大震災関連プロジェクト～こころの再生に向けて 「災害時における宗教的ケアと宗教的世直し思想について」

「東日本大震災関連プロジェクト～こころの再生に向けて」第2回研究会 ご挨拶

みなさま、こんにちは。

本日は、京都大学こころの未来研究センターで行なっている研究プロジェクト「東日本大震災関連プロジェクト～こころの再生に向けて」の第2回目の研究集会を行ないます。

ご参加、ありがとうございます。4時間という短い時間の枠内ですが、実のある議論ができれば幸いです。ご協力、お願い申し上げます。

第1回目の研究集会・シンポジウムは2011年7月20日に行い、その内容はこころの未来研究センターのHPに掲載してありますので、ご一読くだされば幸いです。アドレスは、<http://kokoro.kyoto-u.ac.jp/jp/event/110720.pdf>、です。

そして、本日は、第2回目の研究集会・シンポジウムになりますが、この間に、東日本大震災に関連して、本研究プロジェクト連携研究員の大阪大学大学院准教授・稲場圭信氏が『利他主義と宗教』（弘文堂、2011年11月）を上梓しています。また鎌田が『現代神道論——霊性と生態智の探究』（春秋社、2011年11月）に出版し、また本年3月10日には、同じく連携研究員の玄侑宗久氏と鎌田との共著『原子力と宗教』（対談、角川 one テーマ新書、角川学芸出版）が出ます。ご一読くだされば幸甚です。

本日のプログラムは、以下のとおりです。

- ・日時：2012年1月24日（火）14時～18時
- ・場所：京都大学百周年時計台記念館 会議室Ⅲ
- ・発表者：
鈴木岩弓（東北大学教授・宗教民俗学）「心の相談室と東北の宗教文化」
金子昭（天理大学教授・倫理学）「宗教的世直し思想について」
各45分発表+45分ディスカッション、45分総合討論
- ・コメンテーター：
稲場圭信（大阪大学准教授・宗教社会学）・島藺進（東京大学教授・宗教学）
井上ウィマラ（高野山大学准教授・スピリチュアルケア学）
- ・司会進行：鎌田東二

どちらも、資料を用意してありますので、ご参照ください。また、別紙資料にありますように、被災地支援の一つとして、岩手県大槌町の仮設住宅に住む主婦の方々が編まれた手芸品を「サンガ岩手」（代表：吉田律子さん）の仲介により販売していますので、購入していただければ幸いです。よろしく願いいたします。

2012年1月24日 研究プロジェクト代表 鎌田東二拝

趣旨説明 鎌田東二

皆さん、こんにちは。こころの未来研究センターの鎌田東二と申します。

只今より、こころの未来研究センター主催の研究プロジェクト、東日本大震災関連プロジェクトの「こころの再生に向けて」の第2回目の研究集会を始めます。

第1回目は昨年夏の7月20日に行いました。皆さんもご存じのように、もちろん昨年度の研究計画のなかにはこのプロジェクトは入っておりませんでした。3月11日に東日本大震災が起こって、急きょ、こころの未来研究センターとして、どういう取り組みができるのかを相談した結果、二つの方向の研究プロジェクトを一つにまとめながら推進していくことになりました。

一つは、宗教学や民俗学を中心にしながら、私が担当して、「こころの再生に向けて」の宗教学アプローチの研究会をやっていくことで、その第1回目の研究集会を7月20日に、こころの未来研究センターのある稲盛財団記念会館で行いました。

そのときにも申し上げましたが、京都大学全体が震災関連のプロジェクトを連続シリーズでやっておりました関係上、一般公開でたくさんの人に来ていただく狙いもありまして、160名余の方々に来ていただいて研究メンバーが顔見せ的に発表し議論するという形となり、問題点を大きく網羅的に把握することには役立ったけれども、問題を深く掘り下げるまでには至りませんでした。

そういう前回の反省点を踏まえて、第2回目の研究集会では議論がきちんとできる、みんなが考えていることを自由に言える時間や環境を持ちたいと思い、こういう小さい部屋で、できるだけ議論や質疑応答や意見交換をできる時間を持ちたいと考えて、このような形に設定しました。

第1回目の研究発表の内容については全てこころの未来研究センターのホームページの震災関連ページにPDFで全体を公開しています。

4月から5カ月余りたちまして、この間に、連携研究員であります大阪大学大学院准教授の稲場圭信さんが、『利他主義と宗教』を11月末に弘文堂から出版されました。これについて、皆さんのお手元の「利他主義と宗教」というチラシが配布されていますので、ぜひご購入いただければ幸いです。わたしも同じ11月に被災地を巡った記録も収めた著書『現代神道論——霊性と生態智の探究』を春秋社より上梓しました。

また、連携研究員でもあります臨済宗妙心寺派の住職、僧侶で、芥川賞受賞の作家であります玄侑宗久さんと私が、対談形式ですが、「原子力と宗教」という題で角川 one テーマ新書で3月10日に発売することになっております。

今日は、最初に、東北大学大学院の宗教学講座で宗教民俗学を担当している鈴木岩弓さんに発表していただき、45分ぐらいをめどに議論をしていきたいと思っております。その際に、稲場圭信さんと井上ウィマラさんにコメンテーターとして、各10分ぐらいずつ、それぞれの立場からコメントをしていただきます。そして10分休憩後、次に金子昭さんの発表にな

ります。コメンテーターとして、島菌進さんに 10 分程話をしてもらって、また議論をし、総合討論に入っていきたいと思います。

鈴木さんの発表題目は、「こころの相談室と東北の宗教文化」、金子さんの方は「宗教的世直し思想について」です。どちらも、パワーポイントやワードの資料がありますので、それを手にしながら見ていただければと思います。

以上が本日の流れですが、休み時間等に、島菌さんが代表している宗教者災害支援連絡会で話をしてくれたサンガ岩手の吉田律子さんが岩手県大槌町の支援に入っていて、その大槌町の主婦の方々が自分たちでできる手芸品をとつくれた手芸品を支援の一環として販売しておりますので、ぜひ購入、カンパ、支援をしていただければと思います。

それでは、鈴木岩弓さんの「こころの相談室の活動と東北の宗教文化」に入っていきたいと思います。よろしく申し上げます。

発表1「心の相談室の活動と東北の宗教文化」東北大学大学院教授 鈴木岩弓

こんにちは、東北大の鈴木と申します。

これからお話しさせていただきますが、この題名、鎌田さんの方から頂いた題名をそのまま踏襲しております。ただ、東北の宗教文化はどこまで話せるのかよく分からない、あまりにも大きいので、分からないのですけれど、なんとかこういう方向でお話しさせていただこうと思います。

まず、概括的なところから。1月20日現在の警察庁調べで言いますと、東日本大震災の死者は1万5845人、行方不明者は、まだ3380人もおり、家屋の全壊は12万、半壊は24万戸となっています。

ともかく、ものすごい数の死者が出たということです。近年の日本では年間に100万人を越える死者が出ていますが、宮城県では毎年2万人ぐらい亡くなっています。今回の震災では宮城県内で9507人が亡くなっているのですが、宮城県の年間死者数の半分ぐらいが、この1回の震災で生まれてしまったことになるわけです。

震災に関しては、よく、想定外の3要素で、マグニチュード9.0の大地震。それから、遡上高最大39.7メートルの大津波。そして、それが「想定外」と言って許されるかどうかは別として原発問題。この三点が指摘されます。

今日、私が発表するのは、そういう状態である宮城県において、「心の相談室」という活動をやっておりますのでまずそのお話をいたします。第1回目の研究会のときに、鎌田さんの方から、その辺の話をしろということだったのですが、私はちょっと公務の都合があって出られませんでしたので、改めてその辺のお話からはじめさせていただきます。

我々の活動に出てくる一つのキーワードとして、超宗派的な活動ということがありますので、その実現性などについて私の考えをお話いたしますが、今日のお話しはあくまで鈴

木個人の意見であって「心の相談室」の公的な見解ではありませんので、誤解のないようにお聞きいただければと思います。さて、東日本大震災における「死」というのは、災害死です。災害によってもたらされた死というのは、あくまで、突然の死。つまり、病院で長いこと患ったうちに予想された中で迎える死ではなくて、「突然の死」だったわけです。

ですから、多くは、死に対する準備が不足している。残された者にとっても身近だった人が、例えば、手をつないで逃げていた家族が、津波にあって自分が手を離してしまったので波にのまれ亡くなってしまった。そのように訪れた突然の死であったのです。

ですから亡くなった本人もたぶん、死ぬ、自己の死ということをおそらくあまり意識する暇もなく死に対する準備なんてことはもう、ほとんどないままに亡くなったのではないかと思います。そうなったときに、残された人には病死などの時以上に心残りとか、後悔とか、悔いというものが、より一層強く生じているのではないかと思います。

東日本大震災においては、宗教が、阪神大震災に比べて、ずっと活躍している印象があります。新聞にもよく名前が出てくる感じがします。阪神大震災を契機に「心のケア」の問題が世に知られるようになってきましたし、同じく阪神大震災の起こった1995年はボランティア元年という言葉もあるように、ボランティアの活動が市民権を得るスタートになりました。しかしこの件に関しましては、「宗教と社会」学会のシンポジウムでしたか、山折哲雄先生が震災時の活動に際し宗教者としての特質が見えていなかった、その活動は宗教者でなくてもできたことではないかと、ちょっと批判的なこともおっしゃられていました。その当時は、あえて、宗教団体だということを、あまり言わない、言えない、そういう状況もあったのではないかと思います。

それが東日本大震災においては、そうではなくて、宗教者がその名前を表に出して活動しています。臨床心理士などの活動は当然、「心のケア」ということでやられています。各宗教教団、宗教者も教団などの名前を出して活発に行っています。これは、宗援連などの方からの資料などでもよく分かることではないかと思います。

こういうところで、実は仙台でも宗教者の間で、何かやっていくことはないだろうかということで、ある意味では、自然発生的に組織化されていった宗教者の組織がございます。それが今日お話しする「心の相談室」です。

「心の相談室」の設立前史から見ていきましょう。仙台市内の宗教者の有志達は、震災のあった直後の3月から、身元不明者も含めた震災犠牲者の弔いをやっていました。どこでかと言うと、葛岡斎場という、仙台市営葛岡墓園に併設されている仙台市営の火葬場でした。その火葬場に、仙台仏教会、キリスト教連合などを核にして、宮城県宗教法人連絡協議会の有志が常駐して死者の弔いを無償で行っていたのです。

こうしたことができた一番のきっかけが、実は、この宮城県宗教法人連絡協議会という組織にあり、この組織のスタンスが「心の相談室」という超宗派的組織の成立を可能にした原動力になったのではないかと思います。簡単に、宮城県宗教法人連絡協議会についてお話ししますと、設立は結構古いのです。仙台宗教団体協議会というのが1958年、そ

の当時の宗教団体間の連絡を緊密にして世界平和を目指そうというかたちでつくられたようです。それは実は、宮城県主催の宗教法人事務研修会と絡んでいて行政が、宗教法人をまとめて指導する核にしようという思惑で開催されていたのです。

ところが県の一方的主導だけに不満を持った人たちの間から、各宗派代表者会議という名称変更が提案されました。最初は、県主催の実務的な話で始まった組織であったのだけけれど、の行政的主導のための組織でいいのだろうかという疑問をもち、宗教者同士が交流を図るべきではないかということで、方向付けに変化が見えてきました。ちょうど大学紛争が終わる頃ぐらいですかね。世の中の動きも、こういう方向だった頃ではないかなとも思います。

とはいえその当時は、宗教法人が連帯したあり得べき姿を実現しようという志向もあったものの、県の目指す「宗教法人法」に基づく事務の適性化の推進の流れの方が強かったようで、事務局は宮城県の総務部が持っていました。

これが80年代になると、新たな展開をしていきます。各宗派本山等研修会というのが始まりまして、会に加入している法人が相互に、今年はお伊勢さんに行こうといった具合に、各法人の本部などの宗教施設を巡ることをやりだしました。

その上、宗教間対話の促進を目指して、各教団から、例えば、「清め」ということに関して、どのようなスタンスをとっているのか報告してもらい、一種のシンポジウムになるような話題が考えられていました。そうした中2000年になりますと、事務局がついに県から加盟団体の輪番制へ変わりました。ちなみに今年度は天理教がやっております。

さて、話をもとに戻しますが、この宮城県宗教法人連絡協議会があったから、宗派を越えた弔いの場ができるようになったと思われまふ。その頃は、仙台市葛岡斎場にて、遺族への宗教的ケアというようなことをやる場を開設しておりました。ただ、これは仙台市の施設ですので、仙台市からは4月末までという制約が付いておりました。

この写真は『河北新報』のものですが、牧師さんとお坊さんが並んで座り、ご相談に応じているところです。こういうかたちで待機し、依頼を受ければ無償で、また身元不明者の火葬の場合には、どなたかがさっさと行って最後のお務めを果たしていたということです。

さて、四十九日に当たる4月29日には、南三陸町という宮城県北の津波被害の大きかった町で、牧師さんと、曹洞宗を中心にしたお坊さんたちが、賛美歌を歌い読経しながら鎮魂の祈りを捧げて歩きました。これに参加したメンバーも、「心の相談室」に集まってきた人々が中心でした。

5月からは、新生「心の相談室」が始まりました。この組織を率いる室長が、爽秋会の岡部という、在宅ホスピスの推進でたぶん日本で一番有名なお医者さんです。その方が室長になって、そこに相談員として宗教者やカウンセラーなどが入り、その事務局を私のところで引き受けるよう依頼がありました。さまざまな宗教者同士をまとめるときに、例えば、お寺で会議をやると牧師さんは来づらい、神社でやるとお寺さんは行きづらいとい

うこともあります。宗教というのは、ぎりぎりのところでは価値観の問題ですから。そういう意味で、国立大学の宗教学ならば一番ニュートラルだろうということで、話があったのだと思います。

ちょうど私も、震災後の自分の位置を模索しており、震災を対象に科研費を取ろうなどといったそういう研究者としてのレベルの話ではなくて、今回のこういう問題に、人間として自分から関わられるようなすべがないものだろうかと思っていたところでした。ですので、これだったらもう本当に気持ちよくできるなど、自分自身のなかの、ちょっと嫌な部分をここで捨てて素直に入っていくことが出来ました。その結果、人を救えない宗教学者が、人を救う宗教者をコーディネートしてみなさんの調整をしております。

5月2日には「心の相談室」の存在を知ってもらうために、県庁の記者クラブで記者会見を行いました。この案を出されたのは牧師の川上さんで、なかなか手慣れた感じに会見を行いました。一番中心に座ってらっしゃるのは、宗法連の今年のまとめ役である天理教の方です。ほか牧師さん、神主さん、各宗派のお坊さんと、そういう方々が出席されています。このときには鎌田先生も来られて、写真などを撮られておりました。新生「心の相談室」の目的は、弔いからグリーフケアまでの一貫した切れ目なしのご遺族に対する支援を行おうということで、スタートしました。この裏には、ともかく、これだけ大きな悲嘆に暮れる人たちが出たときに、宗教という問題を抜きにしては、宗教が出てこないわけにはいかないだろうという、そういう気持ちが、とりわけ岡部の方にも強く、その辺りを押さえる方向で進めようということになりました。

ですから、「心の相談室」の活動内容は、まず、弔問の機会を設定しようということで、当初は電話相談を考えていました。それから、震災犠牲者、特に身元不明者に対する合同慰霊の場を設定しようとなりました。また併せて講演などの啓蒙活動をしようということで、実は直後の5月7日には講演会の企画を計画しました。

この写真は、そのためのピラ配りです。これは青葉通りという、仙台では結構大きい通りなのですが、そこにいろんな宗派の人が立ってピラを配っています。この時には二人、ムスリムのインドネシア人にも参加してもらいました。

この二人は私のところの大学院生なのですが、なぜ彼らが入ったかと言いますと、実は今回の震災では、表に出てないのですけれど、ムスリムも犠牲になっているのですよね。この写真のうちの彼が実は仙台地区のムスリムをまとめている人なのですけれど、地震があった直後に塩釜港にいるインドネシア人漁船員と電話で話したのだそうです。しかしその後、今に至るまで行方知れずなのです。ついこの間も彼に確認したのですけれど、いまだに見つかっていないというのですよね。

そういう意味では、ムスリムも犠牲になっているわけで、キリスト教、仏教、神道、イスラームも入ってさまざまな宗教が協力し合ってピラ配りをしています。

そして迎えて7日には、「祈りの心、東日本大震災に宗教はどう向きあうか」という企画を、東北大を会場にして開催しました。ここには、上智大の高木先生、小西先生、龍谷大

の鍋島先生そして東京大学の島藺先生と、地元宮城県の宗教者の方が集まって報告をされ、標題の問題を考えました。

また「心の相談室」ではブログを作って公開しております。東北大学の文学研究科のサイトに入っていますが、「心の相談室」「仙台」の二語で検索していただくと容易に見つけることが出来ると思います。ご覧になっていただければと思います。近頃はそのサイトで、後述しますラジオ放送の内容も聞くことができるようになっていきます。

さて、そうして時間が経ってきますと、傾聴しなくてはいけないと言っているながら、電話相談がかかってこないことが問題となりました。これは被災者の気持ちがまだ落ち着かず、恐らく時期が早すぎたためであったり、こちらの電話番号が周知できていなかったという理由が考えられたのですが、これは困ったとなりました。そこで、待っているのはいけないのだというように考えまして、「Café de Monk」を動かすことになりました。

これはお坊さんたちがやる移動喫茶店で、被災者との対面的な場をつくるために、ケーキとお茶、コーヒー、あるいは、お抹茶を持って被災地に行き、「カフェで文句」を言ってもらおうというのです。「Café de Monk」の名付け親は、金田諦應という曹洞宗の老師ですが、当該地域の「お茶っこ飲み文化」を基盤に考案されました。

東北地方は、ご存知の方はわかりとおもいますが、お宅を訪問すると「まあ、あがらいんわ」といわれて家に上げてもらい、こたつの前に座らされて、「まあ、お茶でも飲まいんわ」とお茶をもらうのですが、そのときに、漬物か何かを箸で、さあ、さあ、さあと進められるのですね。そを手で受けて、「ああ、どうも、どうも」とか言いながら、そういうものを食べながら、お茶を飲みつつお話しをすることが多いのですね。これがまさに「お茶っこ飲み」の慣行なのです。そこで雑談をする。「Café de Monk」では、その機会のお茶の席を、傾聴の機会にしようという考えているのでした。これが始まったのは、5月からでした。

「Café de Monk」はその命名の裏話にあったように、非常に遊び心満点に運営されています。例えばここでかかっているバックグラウンド・ミュージックは、セロニアス・モンクの曲ですし、その音が流れるスピーカーはボーズ、といった冗談のようななかで、関わっていく側も肩肘張らずにゆったりと参加しています。とはいえ被災地に入っていた多くのボランティアが正月で帰省していった12月31日にも、被災者に少しでも温かい気持ちで正月を迎えてもらおうと年越しそばを出す「Café de Monk」までやりました。

「Café de Monk」でお話しをしていくうちには、じゃあ、うちに来て仏壇を拝んでくれと言われて、曹洞宗のお宅の仏壇を、浄土真宗の方が行って拝んでくるなどということもあり、被災地の方々から感謝されております地元の人にとっては、仏教宗派の違いというのは、実はあまり関係ないということが示される場面ですね。

現在、「心の相談室」はどうなったかと言うと、簡単にまとめると、まず合同慰霊祭を月命日でもあります11日にずっとやっています。また電話相談は、毎週水曜と日曜の3時から10時までというかたちになりました。Café de Monkは相変わらず各地で開催していま

す。さらに地元のFM放送で同名の『カフェ・デ・モンク』という番組をやるようになり
ました。最後に講演会、講習会。これは、電話相談員の講習会とか、著名な先生方の講習
会をやっております。

以上について写真を見ながら多少補足してみましよう。この写真は、百日祭。百カ日の
とき、6月18日の仙台市葛岡墓園での合同慰霊の場です。このときは、まだまだたくさん
の身元不明者の遺骨が、その人の身につけていた物と一緒に安置されていました。

このときは齊藤軍記さんという天理教の代表の方が司祭しました。まず、天理教形式で
儀礼を行った後、その後、牧師さんやら、お坊さんやらが、順繰りに自分の宗派流のお祈
りをされました。それ以降、毎月11日、今度はどこと、例えば、今度は曹洞宗、今度は神
道、今度は浄土真宗という具合に、順繰りに回して毎月11日にやっています。仙台ではも
う、身元不明の遺骨は2柱だけになりました。これが全て引き取られたら、ここでやる意
味はなくなりますのでやらなくなるのでしょう。

それから、電話相談は、先ほど言いましたように、神主さんだとか、お坊さん、牧師さ
ん、神父さん、そういう人たちがやっています。相談日の前半と後半に2分して、二人の
相談員を置いて、スーパーバイザーも一人つけています。そういうかたちでやっていますが、
相談依頼は近頃まあまあ、来るようになってきているようです。中には何度も、リターニ
ーというか、繰り返し掛けてこられる人もいらっしゃいます。

また移動喫茶と同名の『カフェ・デ・モンク』というFM番組を10月初めから12月31
日までやりました。先ほどお名前が出てきた玄侑宗久さんも、ここで2度にわたってお話
いただきましたし、日野原重明さんにも、2度にわたってやっていただきました。これ
はYouTubeで聞くことができますので、もしよろしければ聞いていただけたらと思います。

実はFM放送の反響がものすごくありまして、このときに、電話相談の案内や、移動の
Café de Monkの予定をお知らせをすると、「ラジオで聞いたから、来た」という人もだい
ぶ増えてくるのですね。

そういう意味で、やっぱりラジオの効果はすごいと思っております。これは、岩手と宮
城と福島の地元FM3局に流していますけど、そういうところでやっていると、われわれ
の活動のかなり大きな力になっていることが分かります。そうした反響の大きさに応える
意味から、1月からまた3カ月、番組を延長して新たなスピーカーによるお話しを毎週一
回放送しております。

さあ、次に、「心の相談室」の今後のことなのですが、実は、中長期的な展望とし
ましては、チャプレン的な専門職を養成しなければいけないだろうと考えております。た
だチャプレンとかビハーラ僧と言ってしまうと、どちらにしる、特定の宗教が色濃く出
てしまいます。チャプレンは、キリスト教だし、ビハーラ僧は仏教だというわけです。これ
をできるだけニュートラルな呼称にしたいということで、取りあえずは、いまは「臨床宗
教師」と言っています。

このように、自分の宗教を押しつけるのではなく、死を見つめている人々を導ける人は

いないだろうかということを考えておりますが、これが、P C T、Pastoral Clinical Trainingにも通じることなのかなと思っています。超宗派的な宗教者に対する訓練、これをする必要があると考えています。

ただここでしばしば考えていることは、伝統的な宗教文化に対する理解がどうしても必要だろうということです。例えば外来宗教を突然、被災した海辺の村に持ち込んでも、それはちょっと受け入れられないだろう、やはり、被災地の伝統的な宗教文化を理解しなくてははいけないだろうと考えています。

例えば、祖先祭祀の問題で、先祖のたたりなんて言い方を聞くことがよくあるのですが、そういう話は、お寺や神社のほかに、巫女さん、お拝みやさんに関わる中で当たり前に出てくることなのですね。

ですから、こういう文化を理解しないで自分の一つの宗教だけを押しつけられても、やはり、クライアントになる被災者は、ちょっと違和感を持つだけで、何も通じないということになるかと思います。

近頃は、おばけを見たとか、海のなかから目がのぞいていたとか、これは秋ぐらいからずっと出ている話ですけど、そういう話がいっぱい出てきているわけです。やはり、そういう感覚を、いわゆる宗教者がどう説明していくのか、この辺りはすごく重要な問題になるのではないかと考えています。

将来的には、東北地方に臨床宗教師の養成機関がつかれないかなどと考えていますが、この件に関しては最後の最後に一言ちょっとお話しします。それで、東北地方に宗教者によるグリーフ・ケアを根付かせないか。東北地方にというのは、今回、被災者がものすごく出ているところで、ここに今すぐ即効性を持って、できるだけ早い時期にそういうことができる人を養成できないだろうかと考えています。

将来的には、みとりの現場に宗教が入らないことを解消するような、つまり、まさに病院チャプレンのような感じにやれるところが出て、在宅ホスピスの推進と、協調関係が生まれてきたらいいのではないかというのが、岡部室長の考えになるわけです。

そういうときに問題になるのは、宗教者による心のケアなのだけでも、まず一つ、大前提として押さえてなくてはいけないのは、心のケアというのは、宗教者だけができる、宗教者だからこそできるとだけは言えない部分があるということです。精神科医とか、お医者さん、臨床心理士、いろんな方たちと連携プレーでやらなくてはいけないのだけれど、そういった枠組みの中で宗教者がどう関わるかということを考えてみたいと思います。

宗教者なら出来るという宗教者の特質を考えてみますと、宗教者とは早い話、あの世の世界を語るができるメッセンジャーだということですよね。つまり、どんな宗教であっても、現世のことだけを語るのではなくて、やはり、死後の世界のことを語ってきたことが他の「心のケア」従事者との大きな相違点なのです。

その辺りのことを語れること、ここら辺をどう生かしてやっていけるのだろうかということがポイントだと思います。スピリチュアルな、この言葉は難しいのですが、スピリチ

ュアルと言ってしまってよかったかどうかなのですけれども、スピリチュアルな側面からの「心のケア」が求められていると思います。

さて、そういう中で、例えば、亙理郡の山元町の全壊したお宅。8月に撮ったものです。全壊したお宅の土台だけが残されているところですが、海のそばなのですよ。そこにはこうしたかたちで、明らかに慰霊的行為がなされています、たぶんご家族、あるいは関係者でやられているのだと思います。こういう光景が、被災地のそこそこに見られるわけです。

人がこういうことをする理由考えると、やはり、死んだ後の人々の供養、もう少し言うと、死後靈魂の存在を想定しての行動が多いのではないかと思います。

死後靈魂の存在についてまとめたグラフを見ますと、1952年以降の新聞社がいろいろやっており、2003年は私が科研費で実施した全国調査の結果なのですが、信じるという人が、青い部分です。ただこのグラフは、どちらかというと、「信じる」よりも「信じない」人の割合だけを見ていただければいいのですけれども「信じない」は20%から30%は常にいるということです。これ以外は、信じると言うのは、ちょっと恥ずかしいから言わないという人たちを含めていると考えたらいいと思うのです。つまり、死後の靈魂なんか存在しないと考える人が常にだいたい、20から30%いるのですけれども、それ以外のところで言うと、断言するか否かは別にして信じる人が結構いるのだということです。だから、こういう死後靈魂の存在を信じる人々に対して、今後どう関わったらいのかということが、今回の震災においても重要な課題になるのだと思います。

そこで問題となることは、布教とならない形に宗教者が、超宗派的な宗教的救いをもたらすことはどうして可能になるのかということだと思います

布教しないで、つまり、自分の宗教を布教することじゃなくて、宗教的な救いというのはもたらされるのかということと考えますと、これがすごく重要なことになるのですが、私自身としては、簡単なことを言えば、先ほどの、伝統的な宗教習俗に目を配るということ、民間信仰とか、この辺りを理解する必要があるのではないかと思います。

例えば、盆行事がありますよね。盆行事というのは、明らかに、經典的な信仰と、経験的な信仰が、ずれつつ共存している。例えば、釜蓋朔日とか、盆の入りという言い方をしますよね。このとき、地域で一般に何て言われているかと言うと、地獄の釜のふたが開いて先祖が帰ってくると言うのです。

お盆が終わるとどうなるかと言うと、先祖が帰っていく。どこへ帰っていくか、それは言わないのですよね。でも、翌年いつも、地獄の釜のふたが開いて先祖が帰ってくるのですよね。そうすると、お盆が終わって先祖を送る先は地獄だということになります。非常にひどい話ですよ。われわれ子孫は人でなしのことをやっていることになるのだけど、誰もそんなことは言わないのですよね。

つまり、この辺り、民俗的な考え方で話は済んでいるわけなのですね。こういうふうな理解で、先祖が帰ってくるのだと考えて、やっているわけなのですね。だから、普段は地

獄にいるのかどうかということは、普通は考えないのです。

ところがこの問題は、実は、宗教の問題として考えたときに、お盆は浄土真宗では絶対必要ないはずですよ。実はうちは、お東さんなのですけど、うちもちゃんと、お盆になるとお坊さんが来るのですよね。でも「お宅の先祖はもう浄土に行っているのだからお盆なんて必要ない」とは、絶対に言われたいのですよね。

つまり、これはどういうことかと言うと、お坊さん、僧侶にとっては、お盆のことを先祖供養と考えるのではなくて、仏法に対する機会を提供しているといった感じに読み替えてやっていらっしゃっており、これをやらないと、信者からは、「困る」、うちの和尚さんが「やってくれない」と言われてしまうからやっているというわけですよ。

こういう問題は、実は、いろんな民俗宗教のなかに出てきます。私が山形県で調べている「もり供養」も、そうです。浄土真宗の方も先祖供養をやるために来るのですよね。それで、私は1回、いじわるに、真宗がこのような信仰に関わるのは変ですよと冗談めかして言ったら、「いや、分かっているんですけど、それを言われると檀家に顔が立たないし、まあ、まあ」という言い方をされたのです。まったくそうなのだと思うのです。つまり結局、宗教の原理原則だけを語っているだけでは、現実に布教というか、人々の信仰を集めていくのは、なかなか難しいことだと思うのです。

その、もう一つの例。南三陸町細浦の徳性寺という、ここは私が五月以来折に触れて入っている被災地なのですけれども。いろんな人が被災地に来るのですけれども、たまたま、これは三屋裕子さんといって、バレーボールで有名な人ですね、

彼女がアシックスと一緒にやっている、こういう小さい集落を回って、ボール、Tシャツをみんなに配って軽い運動をしているのですけれど。

ここで、みんなで運動をし終わると、何をやったか。「果報団子」をやったのです。これはまさに民俗的な行事なのです。果報団子というのは何かと言うと、ここにさっと書きまじったけれど、弘法大師が一夜の宿を求めたけど、家が貧しかったので、つくった団子のなかにわらが入っていた。そして、弘法大師さんに、ごめんなさいという意味で、すまないと謝ったら、弘法大師は、「これは果報だ、めでたい、めでたい」と言って喜んでくださったという。こういうことに来歴を持つもので、弘法大師の誕生日といわれる、旧暦11月24日にやるのですが、これは11月23日のお休みの日にやったのです。

結局、無病息災を祈っている行事なのですけれども、宮城県でもこういう行事をやるのです。一部の団子に、萩の枝を1センチぐらい切ったものが入っているのです。それがあると、当たりということ、徳性寺のご住職は賞品をくれるわけです。

参加者はみな、すごく楽しそうに団子を噛み、当たっているかどうかを確かめ合い、入っていると大喜びするのです。みんなの団子のどこかに入っているのですよね。みんな食べながら、うんとか言いながら、「あ、ないわ。これ、あんたにあげる」と言ってかじった団子を人にあげたりして、子どものように騒ぎながらみんな楽しそうに食べていました。

実は、これが終わって帰るとき、あるオバアチャンは「震災以来こんなに笑ったのは初

めてだよ」と言って帰って行かれました。おじいちゃんたちが来ないのは、ちょっと心配なのですが、おばあちゃんたちは、そういう具合で気分も軽く参加されていたのです。

さて次に、実際にケアに関わる個々の宗教者は、自分の個別宗教に基づいてケアをするのかという問題をかんがえてみましょう。その場合の宗教性はどのようなふうになるのか。この辺の問題ですけれど、これは、もう私自身としては、宗教が広まっていくことを考えてみれば、次のように考えるしかないのではないかと思っています。

つまり、宗教の歴史というのは、早い話、その教えが完全に決まってしまうとそれから変わらない宗教なんてあり得ないわけですよ。結局、まあ、言わずもがなのことですが、インドで生まれた仏教は、中国や朝鮮、日本に来る間に、例えば、日本だったら妻帯するなんて、こんな大ごとの変化が起こって、それでいて日本人は不思議もなく仏教だと言って信じているわけですね。

こういうことを言い出すと、宗教の教えが変わらないでいるなんてことはあり得ないわけですよ。さらに、心強くするのは、古野清人先生のキリシタン研究のなかに、「純粹、または正当な世界的な宗教、その信奉する教理、教義はしばらく別にして、現実には存在しない」と、はっきりそこまで言い切ってもらっしゃいますね。まさにそのとおりだと思うのですよ。

どんな教えもみんな、どこかで曲がっていきながら、広まっていく。それが当たり前だということで、それを、「宗教の民俗化」、「民俗の宗教化」という捉え方ができると思うのです。これには、ちゃんとネタがあって、大正大学の藤井正雄先生が、「仏教の民俗化、民俗の仏教化」ということを言ってもらっしゃるわけですが、まさに、こういうようなかたちにして宗教は広まっているわけです。

ここにお示しした図、ちょっと、いい図かどうか分からないのですが、こんなところですよ。このグラデーションがあるわけです。つまり、こっちが思いっきり教義的な部分が強いです。対して、こちらは思いっきり経験的に、ぶつぶつのお地蔵さんだから、いぼ取り地蔵だとか、本当に思い付きのような感じでやっていく経験的、民俗的な信仰と、濃淡があつて。

ここのうちの、どこに自分の立ち位置を持ってくるか、それだけの話であって、こっちをひん曲げたら駄目だではなくて、どこら辺までひん曲げられるか、おそらく、そこら辺の立ち位置を考えて、実際に宗教が広まってきたと言えるのではないかと思うのですよ。ちょっとこういうことを考えていくと、先ほど5月7日に東北大学でお話を頂いた鍋島先生の、南三陸町の役場施設で最後まで「大津波警報がでています」と放送で避難を呼びかけていた女性職員のお葬式を彼が執り行ったお話を思い出しました。先生はちょうど仙台にある西本願寺の別院に泊まり込んで、毎日のように海の被災地に行っていたら、そこで本当に一生懸命やっていたらっしゃるのをご覧になった遺族の方が、「あなたにやってほしい」と言われたというのですよ。

私は鍋島先生から、「私、あした、彼女の葬式をしなくちゃいけないんです」と言われた

ことに對し迂闊にも「あ、彼女は浄土真宗だったんですね」と言ってしまったんですね。この辺が宗教学者の浅はかきで、龍谷大学の先生がやるのだから、浄土真宗、しかも、お西でやるのだらうと思ってしまつての発言だったのですが、彼はぼつと、「知りません」と答えられました。「私は知りません。ただ、先生にやっていただきたいと言われたのでお引き受けしました」と。

つまり、求めている側も、この先生は曹洞宗かどうかとか、そんなのは関係ないのですね。お坊さんとしてきちっと一生懸命やってくれた、この人なら家族の葬儀を出してもらつて全然問題ないのだと言うわけです。

だから、そのところで、たぶん鍋島先生は、浄土真宗的な司祭をされたと思いますよね。読むお経も、曹洞宗とは違ふと思いますよね。だけれども、そのところは、遺族の人はこだわつてないのですよね。そこは、弔いをやつてもらえるかどうかです。

つまり、ここばかりにこだわつて進まないのではなくて、意志をどういうところに持つてくるかで進むことが、いま、一つ求められていることなのではないかなと思います。ただ、限度がありますよ。じゃあ、教義はなくなつていいのかという話ではないのですけれど、どこへ立ち位置を持つて行くのかという辺りがちょっと重要なかなと思います。

さて、それで、それに近いことで、これも「心の相談室」でやつていたことで、12月20日に石巻でクリスマス・ランチコンサートをやりました。これは、石巻の結婚式場が貸してくれたのです。この施設のそばには、石巻の中でもものすごく大規模な仮設住宅の集合地があります。その人たちを招待して開催しました。

ここには牧師さんやお坊さんが入り交じつてお世話しているのですが、赤い帽子をかぶつていながら、お坊さんたちもいっぱい入つていっているのです。クリスマスプレゼントを配りますと、もう、皆さん喜んで、久しぶりにゆつくりできるということで、ごちそうを食べ、プレゼントをみんな子どものように喜んで受け取つていました。特に、これは、金田老師なのですけれど、頭にこんなトナカイの角を付けています。このようなことをする人のことを仙台あたりでは「おだつもっこ」と言います。「ふざけんぼう」といった意味です。

次の写真は、何をしているかと言うと、数珠を差し上げているところです。この時は希望者が、本当にあつという間に列を作りました。谷山という浄土真宗のお東さんと曹洞宗の金田老師が一人一人の手を握りしめて数珠を差し上げていました。

つまり、「クリスマスだから、曹洞宗、浄土真宗は出ない」のではないのですね。これは、もう、一種の日本の民俗行事と考えればいいわけで、こういうなかで歌つたり、踊つたり。本当に踊りだすのです。皆さん、これ、踊つていっているのです。

そしてさらに、このおばさんが、このお坊さんを捕まえて、一言みんなの前で言つたのは、「このお坊さんに救われた」というのですね。自分のところにずっと来てくれて、本当に救われたのだからというのを、うれしく踊つた後に、ここで、わざわざみんなの前で披露している。こういう感じになっているのですね。

ただ、逆に、このときに、これは彼への悪口でも何でもないので、川上さんは

牧師です。牧師さんはさすがに、この数珠のときには、一切手を触れなかったですね。やはり、この写真は、宗教学者としての目で撮ってしまったのですが、仏教の数珠を配るところへは、やはり、キリスト者の彼は入らなかった、入れなかったということなのだと思います。だから、これは、彼にとってのグラデーションの立ち位置が、どの辺かということだと思います。トナカイのあんなのを付けられる曹洞宗のお坊さんとは、ちょっと、たぶん、立ち位置が違うのではないかなという気はします。

最後にちょっと一つ、これから困った問題になるのかなというのが、祖先祭祀の危機です。つまり、日本人の宗教の根本的な、ベーシックな部分に、祖先を祭ることがあるわけですよね。いろんなかたちであると思います。それが、被災地の一部では、自宅から位牌、遺影、過去帳が流出し、寺院からも位牌、過去帳が流出し、墓地からは遺骨、墓石が流出するという事態が起こってしまっているわけです。

これを、写真でお見せしますと、まさに祖先の依代が喪失してしまう事態が一部でもう起こっていることがわかります。これを見ていただくと分かるのですけれども、仙台より南の方は、だいたい津波が来ても、あんまり強い津波じゃないので、1階がやられるだけで済んでいるのです。だから、全壊なのですけれども、倒れていないのですよね。こういう家が多いのです。1階だけ何もなくなっている。

仏壇というのは、普通1階に置きますよね。だから、仏壇の中にあつたものが全部なくなっているのですね。同じことで、お寺の1階も全部やられています。檀家の位牌は位牌堂などみんなこういうところにあつたのですが、流されてしまっています。お位牌も、過去帳も流されているわけです。そうすると、先祖の名前が分からない。

さらに、これはいまのお寺の墓地ですけれども、墓石がもう、ぼろぼろに倒れているわけですね。さらに倒れているだけでは済まず、こうやってカロートの中が洗われてしまっているのですね。全部洗われて、骨が出て、どこかに行ってしまうわけですね。こんなふうに残っていることもあるわけですが。こうなってくると、先祖の依代がまったくなくなってしまうのです。

日本には、死後33年とか、50年たつと、個別の死者の祭祀はしなくて、まとめて鈴木家先祖代々とか言って、「死者全員を先祖とまとめて供養してるよ」という「吊り上げ」と呼ぶとても便利のいい装置があるのですけれど。

今回流されたのは三十三回忌になる以前のモノも多々あつて、本当に何年か前の死者でも、戒名などをメモしていなかったら死者の依代はもう全然なくなってしまうのですね。そうすると「先祖代々」にすればいいという言い方もあるのだけど、この辺りはどうなっていくのかなと考えています。

今日はちょっと「心の相談室」の活動のご紹介をしましたが、物の支援を切り口にして、心の支援をやっている現状をお伝えしました。今後はとりわけ、「Café de Monk」は効果がありますので、移動喫茶でお茶やコーヒー、ケーキをお出しするところを通じて、いろいろお話しする機会をつくる意味での、心の支援を何とかやっとうとやっています。

地域文化に根差した活動、先ほど言いましたように、「Café de Monk」は、お茶っこ飲み文化ですけど、こういうところが、伝統文化による生活規制が結構強い被災地においては、すごく重要なのかなと思います。

契約講という、葬式を担う相互扶助組織が特に海辺の方はまだ盛んでした。そういうこともあります。それから、檀那寺との親密度というのもあります。

要は、被災者の価値観への目配りが、非常に重要になるのだろうなと思います。ですから、弔いの現場では、超宗派的なケアの可能性を何とか考えて、被災者の持つ宗教的伝統に理解を示す方向で、入り込むことができないかなと考えている次第です。

さて、最後の最後に、これは東北大のなかでの活動を紹介しますが、実は、方言をやっている小林隆教授のところでは、『支援者のための気仙沼方言入門』というものを配っております。よろしければ、この本と一緒に一応、回します。東北大にも、やはり、地元の文化を理解しないで入られてもしょうがないという意味で、方言の専門の先生ですけども、こういうものをつくってまず言葉を理解して現地にはいるということのお手伝いをしています。

それから、実はいま、私の足下でちょっとした展開が起こっています。ここだから、初めて言う話ですが、実は、東北大の文学研究科に寄附講座をつくることが、教授会では決まりました。「実践宗教学講座」といいます。

それは何かと言うと、先ほど申し上げた、最終的には臨床宗教師というものを養成するための前段階として想定している、理論的に、いままでのスピリチュアル関係のところを総括して、今後どういう方向を目指すべきかを提言する、理論と実践の講座で、学生は採らず、3年間の年限付きの寄付講座を考えています。

いまのところ、キリスト教系のいろんな集団からのお金を中心に、そこへ実は仏教も入る可能性がいま出てきているのですが、そのお金で3年間運営する話になっています。ちょうど、教授会は通ったので、これから本部に上げるところで、そのための書類づくりで、このところガタガタしております。何とか、4月から実現することでやっていきたいと考えております。

そういう方向ができますと、宗教の社会貢献の方にもつながると思いますし、もう少し言えば、心のケアに、宗教者としての関わりを持つ方向付けみたいなものが、いままでのものを総括しながら、新たに提言できたらいいのではないかと考えています。

一応、私の発表は、こういうところなので、終わりにさせていただきます。どうもありがとうございました。

○鎌田 どうもありがとうございました。

私は宗教哲学や民俗学を専攻対象にしているので、経典的信仰の立場と経験的信仰の立場の間の幅を往来する立場にいるので、鈴木さんの発表は非常によく分かりますし共感できます。

では早速、『利他主義と宗教』という本を弘文堂から 11 月に出版された稲場さんに 10 分ほどコメントをしていただきます。

稲場さんは宗教の社会貢献の問題を研究されてきて、7 月 20 日のときもその立場から発表され、東日本大震災後にどういうネットワークや動きが宗教界や社会において出てきているのかとか、ソーシャル・サポートの在り方について幅広く研究されてきています。では、稲場さん、お願いします。

コメント1 大阪大学大学院准教授 稲場圭信

はい、皆さんこんにちは。大阪大学の稲場です。

鈴木先生の「心の相談室」のカフェ・デ・モンクのお話は、東京で行われている宗教者災害支援連絡会の方でもご報告いただきまして、今日もあらためて、その後の活動の広がりをいろいろと教えていただいたと思います。

本当に、非常に多岐にわたるので、10 分間で何に触れるかなというのが非常に難しい。私の後に、スピリチュアルケアの領域の専門家の井上ウィマラさんがコメントされるので、私はちょっと幾つかピックアップして、コメントします。

「心の相談室」の活動は非常に多岐にわたり、電話相談から、弔い、そして、カフェ・デ・モンクの方が変わっていったことと、ラジオの話もありました。先ほど、心のケアに関わることで、宗教者ならではの話がありましたけれども、また、あの世の世界に触れられる、そういったことをやってきたのが、宗教者、専門家であるというお話がありました。

実際に現地でも、そういうニーズがあるというのは私も分かります。そこで、被災者の反応として、そういった方もいるし、そうじゃない方もいるなかで、宗教者は、融通無碍というか、臨機応変というのですかね、相手を見て、機根に応じて、宗教者が説いていると思うのですけれども、もうちょっと、こういうことがあったという、エピソードも含めて知りたいです。

これは、東北の文化ということも関連する、先ほど民俗宗教の話もありましたけれども、ほかの地域ではどうか。東海・東南海・南海連動型地震もこの先あるでしょう。そういったときに、違う地域で、どのような対応ができるのかも、また重要なことと思います。

それから、諸宗派、諸宗教、超宗派の連携がうまくいっているという話で、これは震災の前から 30 年ぐらい宮城県での宗教者の連携があったということですが、その土台があって、うまくいっているというお話でした。その後、実際にこういう活動をする上で、先ほどの川上さんの、数珠には触れないということもありましたけれど、グラデーションで、ここまでは踏み込めるというのが、意見の対立、価値観の対立はあるのではないかと。

そこには、やはり葛藤があるのではないかと。それをうまく乗り越える、どういうふうにして、たぶん、夜を徹して話し合いをしたりもあるのではないかと。これはちょっと大変

だということも、また教えていただけたら、ほかの地域での今後の取り組みにも大きく役に立つのではないか。

あと、行政との連携、問題、課題が、最初の方でちょっと触れられていましたけど、進めていく上でどうだったのかも、ちょっと知りたいです。ここら辺、心のケアということで、基本的に、宗教者以外の動きが、行政でやはり多いと思うのですね。

ちょっと大阪府の話をしてします。大阪府も心のケアで入っていました。3月25日から入っていたのですけれども。細かくは大阪府のホームページにもあります。心のケア相談室という名前で、小学校でやっていたらしいのです。

医療チームの専門家という人たちなので、震災の1週間後から入って、だいたい100日以内に撤退してしまう。災害反応の、「ハネムーン」という、気分が高揚して助け合いが起きている、いい状態のときに、この専門家の人たちは入っている。もともと精神疾患のある人が対象だったり、当然ながら、身体的な問題が起きている人が対象。それから、消防士とか、地元の警察の方々、遺体捜査とかに関わっている方のケアはしているわけです。基本的に3カ月弱で撤退してしまうということですね。

だから、宗教者の息の長いケアというのは、ちょっと違うのではないかなということ。そこら辺も、宗教者ならではということが、ずっと長い関わりで出てくるのではないか。

これは、神戸の方ですけれども、「こころのケアセンター」の加藤さんが、こんなことを言っているのです。医者が来たら、「よそ者には話さない」と。地元の宗教者、自分たちのことが分かっているという人には話すというのは、こういった専門家、医療の方々も分かっているということですね。

あと、「聞く」リスク。よく、こころのケア、傾聴ボランティアで、一つの関わった成果みたいに、津波で家が流されたことを話してもらえたから通じ合えたと感じるボランティアの人も多いと思いますけれども。専門家が聞くころのリスクとおっしゃっているわけですね。また、宗教者は、ここら辺で、もっとうまく入っていけるのではないかと。

医療の側の専門家の人たちは、仙台の避難所に入っていました。最初ピンクのジャケットを着て入って行って、ピンクの人が話を聞いてくれると好評だったらしいのですけれども、だんだん敬遠されちゃったのです。これは、やはり東北の文化にあるのか、東北だけじゃないですけど、日本のなかに精神的な病に偏見がある。あそこの娘がピンクの人と話していたと。そういったところから、ピンクのジャケットをやめて、名称もストレス相談室に変えていったということがあるのです。

大阪府も、実は、心のケアとかのジャケットを着て入っていったのです。私がちょっと親しくしている、大船渡に入っている北海道のお坊さんが、本当に家族的な付き合いを被災者としてしているところに、大阪府の「こころのケア」チームが、心のケアというジャケットを着て入って行って、被災者の方々が非常に嫌な思いをしたと。

大阪府から行った人たちは、心のケアの専門家ですけど、何か話すこと、相談はありますかと入っていったらしいですね。そうしたら、「なんでおまえらに話さなきゃいけない

んだ」ということもあったみたいです。

こういったなかで、やはり、医学的、心理的なものだけでない、もっと深い心に関わるニーズがあるというのは、鈴木先生の話も、また、いろんな方々からも私も聞くところです。

そういったところで、『カウンセラーと宗教』という本のなかにも、カウンセリングはもともと宗教家の仕事だと。実は、宗教者でも、心のケアの専門家ではないから、なかなかとおっしゃる方が多いのですけれども、カウンセリングの専門家の方が宗教者のカウンセリングを見て、むしろ、熟練したカウンセラーが何年もかかるような難ケースが見事に収まっていくと。治るとかではなくて、宗教者がそこにいて、何かを聞くことによって収まるという表現を使っているのですね。ここは、やはりすごいなあとも感じました。

大阪大学の前総長の鷺田さんが、言葉を受け止めるにはアースが必要だと言っています。聞く側、話す側。被災者、心のケアで専門家に話す。でも、それを聞いている側が、そのままともに全部受け入れてしまったら、聞く側の本人も苦しいし、話している側も、実は苦しいという話を聞きました。

真摯に聞いてくれているのはありがたい、でも一方で、ああ、そうかと、本当に同じように共感して、苦しそうな反応をすると苦しくなるということもあるみたいですね。だから、鷺田さんは、聞く側にはアースが必要だという話をしているのです。

私は、アースというよりも、神、仏。宗教者はやはり、上の方に図を書くのがいいのかなと思ったりもします。そういうことがあって、やはり、宗教者の心のケアは、ちょっと違う領域まで踏み込んでいるのかなあと考えたりもしました。

もう一度最初に戻ります。やはり、宗教者ならではのというのが、医療の専門家、精神科医の、普通でいうと、ワンセッション、どれぐらいの時間でやるという、オン、オフがはっきりしているようなのは違う、宗教者の関わりというのは、もっと奥深いのではないかと。

あと、連携ですね。行政との問題とか、ここら辺は、今後も全国で、行政と宗教者のさまざまな連携も必要なので、大きな課題。先ほど、そういった専門の資格を持った者を生み出していくという話もありました。以上です。

○鎌田 ありがとうございます。いま、三つの大きなコメントの柱があったと思いますので、後で鈴木さんにお答えさせていただきます。

井上ウィマラさんは、高野山大学でスピリチュアルケア学科ができたときに准教授として赴任されましたが、次に、井上さん、コメントをお願いします。

コメント2 高野山大学准教授 井上ウィマラ

私は、パワーポイントの用意がないので、二人の先生のお話に付け足すかたちでお話し

せてください。いま、お配りしたプリント「災害後の悲しみに寄り添う支援の在り方」は、『緩和ケア』、以前は『ターミナル・ケア』という名前で出ている雑誌で、「東日本大震災・いのち・つながりをいつまでもここに」という特集を組んだ時のものです。鈴木先生のお話に出てきた岡部先生が冒頭に書いています。その次に金田住職も書いています。それから私の順番でした。ここに、私自身の活動も含めて思うところが書いてありますので、それをご紹介します。鈴木先生のお話コメントするかたちでお話しさせていただきます。

3.11 の前後、私は複雑性悲嘆の研究者と面接する予定を組んでおりました。複雑性悲嘆とは、今回のような非常にトラウマティックな災害であるとか、殺人事件とか、戦争などに出合いますと、人間のこころは非常に傷ついて、それがこんがらがってくると、うまく悲しめなくなります。涙を流して悲しめないと、その悲しみは身体化して、非常に複雑になり長期にして、医療的介入を必要とするようになります。それが、プロロングド・グリーフとか、コンプリケーティッド・グリーフと呼ばれ、研究対象になってきています。

そうした複雑性悲嘆などの場合に、PTSDの治療法として仏教瞑想のマインドフルネス瞑想が注目されています。エクスポージャー（暴露法）といって、辛い記憶を少しずつ思い出しながら馴化していくのですが、その補助作業のような形で取り入れられている呼吸法が、実は仏教瞑想のマインドフルネスに胆を發したものだだと思っていただければいいと思います。こうした関係で、複雑性悲嘆の研究者の方が私のところに話がしたいと連絡をとってきてくれたのですが、面接の約束をしていたのが3月15日でした。

二人とも、こんな大きな出来事の直後に会うことになるとは思いませんでした。彼女は阪神淡路大震災の被災者でもありました。そんな出会いがきっかけで、ジャパン・ディザスター・グリーフ・サポート・プロジェクト、JDGSというプロジェクトができました。

最初は、関西のメンバーだけでプロジェクトを組んだのですが、関東の方でも国立精神・神経医療研究センターの先生方も同じような活動を始めていて、関東と関西で別々の情報を流してはいけないということで、統合してJDGSができました。年が明けて、ホームページができましたので、関心のある方はJDGSで検索してご覧ください。

17 ページの上に、「被災地の外部から被災者を支援する」というリーフレットが載せてあります。例えば、被災地にはさまざまなボランティアの方々が入ってゆきますが、いろいろトラブルも発生しています。神戸のときからの学びがありますので、そうした情報を集めて、こういうことに気を付けてくださいという情報をまとめました。

小さい字なのですが、最初の項目を詠んでみます。

「被災した人を弱者として何々してあげる、かわいそうにといった態度や話し方をしないでください。相手の自尊心を傷つけることになります。また、頑張ると安易に励ますことも控えましょう。どう頑張ればよいのかも分からないときがあります。頑張るとや、頑張ろうという言葉は、何と云えば分からないときに自然と出てくる言葉ですが、できるだけ使わないようにしましょう」

では、「頑張ると」という一言が出てきそうになったときに、どうやって思いとどまれば

いいのかというところまで盛り込みたかったのですけれども、リーフレットではそこまで書けません。そうしたもどかしさを抱えながら、最小限の言葉で最大限の情報を伝えようとなりました。被災後1年ぐらいは、リーフレットを使った情報提供が有益だという、海外での先行研究もありますので、いくつかのリーフレットを発行いたしました。

私は2回しか被災地に入っていないかもしれませんが、17ページの写真で見ただけのように、がれきの撤去作業から、仮設住宅でのお茶っこサロンまで、いろいろな体験をさせていただきました。

次の18ページに移りますと、惨事ストレスということが出てきます。震災当日や、その後の救急救命期に救援活動に入った自衛隊や消防とか警察とか、あるいは、遺体を探してくださるために船を出していただいた漁民の方とか、非常に大きなストレスを抱えました。

その時直接的には、そこにいないとしても、被災地に入って支援活動に携わり、その、あまりのすさまじさに、無力感に打ちひしがれ、日常に戻ってきたときに現実感を失ってしまったりとか、自分は何か悪いことをしてしまったのではないかという罪悪感にさいなまれたりすることがあります。そうした状態を惨事ストレス（クリティカル・インシデント・ストレス）と呼ぶのだそうです。

ですから被災地から帰ってきたら、ボランティアの人も含めて、専門家であっても、大変だったから十分な休みを取るとか、お互いに体験談を話し合うとか、周囲が十分なねぎらいの言葉をかけるとか、それなりのケアが必要だということも分かっています。

18ページの後半に、地域性に根差したところのケアの構築を、というところがあります。鈴木先生の話にもつながるのですけれども、東北、仙台近辺の被災地で活動されている心理士やカウンセラーの方が数人集まってくださいまして、そこでお話を伺う機会がありました。そこで語られたのは、やはり東北独特の精神文化、風土があるので、心理士やカウンセラーという名前、立場で聞こうとしても、同じ方言を使う人であっても、仲間であっても、どうしてもやはり語れない、語ってくれないことが多いということでした。

でも、そうした困難さを通して伝わってくる被災者の罪悪感の問題とか、遺体との対面に関わるさまざまな苦しみがありました。あるいは、ある被災者の方が、仲間の遺体、遺骨安置所の番をしているのですが、生き残った家族には、自分が何をしているかという内容を話すことができずに、毎日、そのボランティアの現場に通わなければいけない。そうした方々の心のケアはどうしたいのかとか。いろいろなお話を伺うことができました。

やはり、言葉によるカウンセリングだけではなくて、ボディーワークと呼ばれるような身体的なアプローチ、声を出すこと、伝統的な芸能や祭りなどを生かして、多様なかたちで悲しみを表出できる、そのエネルギーを共有し合えるようなかたちのグリーフケアが必要ではないかなと思いました。

泣いても、怒ってもいいんだよという環境を提供することです。例えば、先ほどの鈴木先生のお話に出てきた、笑ってもいいとかいうことがあります。こんなに笑ったのは初めてだ。それまで止まっていた時間が初流れはじめたということです。そうした、集団的な

表出環境の提供と、個人的なカウンセリングが有機的に絡み合うことが必要だろうということです。そのためには、やはり、宗教だからこそこできるケアと同時に、医療、心のケアの専門的な視点から分かってきたことを組み合わせる必要があります。

例えば、PTSDとグリーフはどう違うのかということを理解しながら、先ほど出てきた「最近おばけが出てくる」とか、「海から目が見ている」というふうな現状に対して、どういうふうな関わりをするのがご本人にとって一番いいのかを考えてゆく必要があるでしょう。宗教的な、あの世のスピリチュアルなこととしてだけではなくて、それはもしかしたら、心の傷から出てきているものとして見た方がいいのかもしれない。そういう心理学的・医療的見知を持ちながらも、でも、その人のナラティブに寄り添っていくかたちがいいのではないかと思います。そこら辺の絡み合いの具合を考えることが大切です。

それを痛感しましたのは、海外の災害研究の論文をチームで翻訳したときのことです。私もパークス先生という先生の論文を翻訳しました。その先生も含めて、何人かの方、特にPTSDの専門家の方がおっしゃることは、PTSDが癒えて初めてグリーフに移ることができるということでした。「PTSDの傷が癒えた人は、さめざめと泣かれるのですよね」という専門家の言葉がありました。

PTSDの治療というのは、自我機能の回復に関するものではないかと思います。トラウマによってバラバラになってしまった機能の統合性を回復して、しっかりと悲しめるまで自我が立ち直ってゆくことのお手伝いです。その後で、あらためて悲しみをいかに癒やしていくか、感情を表現して、そこに意味を見出していくかという過程が続きます。そういうにグリーフの話とPTSDの話を見分けられるようになること。しっかりと見分けながら、時に重なり合って見える複雑なところを読み解きながら、宗教がどういうふうに関わっていくのがよいかと考えていく必要があると思います。

災害研究では、医療の手が行き届く範囲は本当に少ないので、これまでは自然に治るだろうという見方をしていた部分が多いのです。その、自然に治るだろうというところに、宗教が果たしていた役割がどれぐらいあったのかということですね。薬の治験をしても、30%はプラシーボ効果だそうです。でも、そのプラシーボに何か大切な意味があったのかもしれないのです。そういう視点が重要だと思います。

東北には伝統的な祭りがたくさんあって、神楽もあります。その神楽の頭が流れ着いて、神社に届けられているという話で、それを見に行ったことがありました。その神主さんのお話では、神楽や祭りが、まちを再建していくときの人のつながりの大きな支えになっているとのことでした。そうしたことを含めて、東北独特の伝統的な文化を、いかにして一緒に涙を流して、怒ったり、笑ったりしながら、もう1回町や人々のつながりを作り直していくための、新しい依代にしていくことができるかなということです。トラウマという視点と、グリーフケアという視点から、祭り文化を再検討して、現代によみがえらせるためのつながりづくりを考えなければいけないのではないのかなと思っています。

そろそろ10分たちましたので、あと最後に、もう一つ。あの世の話に関わることなので

すけれども、スピリチュアルケアの現場にいて思いますのは、スピリチュアル、あるいは、あの世と言われることの7、8割は、家族の問題であると僕は確信をしています。

3、4世代にわたって、その家族のなかで起こった自殺、他殺、あるいは、人工妊娠中絶、さまざまな語り得ない問題があります。それが人生の生きにくさをつくって世代間を伝達されます。スピリチュアルという装いを持つと、その語りにくさが少し分かりやすく、表現しやすくなることがあるのではないかということです。スピリチュアルな問題を考えるときには、上に3、4世代、下に3、4世代ぐらいのスパンで、その家系に特有なナラティブというか、物語の絡み合いを考えなければいけないと思います。

そうした、家族の間のつながりを、最初に心理学のなかで指摘したのは、おそらくユングのファミリー・コンステレーション（家族布置）という考え方だったと思われます。身ぶりという非言語的コミュニケーションによって、感じ方やいき方のパターンが伝達されるということです。スピリチュアルと言われる背景に、どんな、家族の生きにくさがあるか、あるいは、つらくて語れなかった記憶があるか。それと同時に、その家系が持っている明るさとかユーモアとか、生き抜く強さがあるはずです。そうした家系の問題として見直すことの有用性です。

鈴木先生のお話で、お墓がなくなって、位牌が流されたので、先祖崇拝が難しくなったということですが、逆に言うと、それをいかにチャンスに変えていけるかという視点です。宗教者が、先祖を祭るための依代を失ったときにこそ、自分の家系について、家族の問題について、もう1回家系図をつくってみようとか、家族歴を採集しなおしてみようとかすることができるはずです。生育歴、家族歴という視点に立つと、医業職、心理職の人には分かりやすい、つながりやすいと思います。

ちょっと言い方はおかしいかもしれないけれど、遊びの道具というか、プレイセラピーのような感じで、家族について思い出して、うれしかったこと、悲しいこと、よかったこと、もったこうしたかったことなどを語ることができる舞台装置を提供することが必要ではないかと思います。具体的には、私は、カウンセリングのなかで使えるコンステレーションという手法を考えて、いま医療の現場でも使えるように紹介しています。

もう一つ、アースの問題。稲場先生が鷺田先生のアースという視点を語ってくれましたけれども、これは、心理職の現場の人が、困難な事例に出合ったときに、自分自身の生まれ育ち含めて先輩からカウンセリングしてもらうことに通じます。スーパービジョンと呼ばれます。先達に、自分の問題を話してみる必要があるのですね。

医療や心理の現場で、日本ではスーパービジョンの制度がないに等しい状況です。だからこそ、スピリチュアリティの問題が医療に入りにくいのではないかと思います。鷺田先生はアースという言い方をしたけど、スーパービジョンという言い方をすれば、現場の方はよく分かってくださると思います。

心理職、医療職の方々がスーパービジョンを受けるシステムが整うために、宗教が何を提供することができるかが問われていて、これに答えられなければ、宗教は見放されるか

かもしれません。だからこそ、いま、みんなが現場で頑張ってくださいているのではないかなと期待したいと思います。

○鎌田 ありがとうございます。特に最後に指摘された問題、位牌とかが流された後の家族が自分たちの家族の在り方や家系をどういうふうにして振り返り再構築していくことができるかという問題は重要な問題点だと思います。私の観点からすると、いままで鈴木さんの話された民間信仰の世界のなかにある、地域の伝統芸能の強さや、祭りや祈りが震災後どういうふうにかされるかは先祖崇拝の話ともつながってくると思います。

鈴木さんに質問がありましたので、まずそれに答えていただいてから質疑応答に入りたいと思います。

○鈴木 では、まず、お二人とも、ありがとうございました。

まず、最初に順番でお話ししたいと思いますが、稲場先生の方からの、宗教者ならではの辺りの、被災者の反応はということですが、先ほど申し上げましたように、たぶん被災者の人たちには何教の教えがどうのこうのと、そういうレベルの話は余り意味はありません。やって、反応のある方もいらっしゃるけれど、多くはそうじゃないと思います。だから、そういう意味で言うと、その辺りの部分は、民俗宗教的なものの方が強くなるのではないかと思います。

早い話ですね、宮城県の宗教色はどうかと言うと、圧倒的に曹洞宗が強いんですね。今回被災したお寺もすごく多い。寺族も含めてお坊さんにも亡くなられた方がおあります。曹洞宗というのは、どちらかと言うと、仏教のなかでは何でも取り込む方向ですので、民俗宗教的なものとの関連はある程度うまくやられているのではないかなと思われま。

被災者の方たちの反応は、宗教者なら誰でもとはたぶんあまり思っていないのですけれども、それをちょっと一歩引いて見れば、そういう地元の宗教的伝統のなかの枠組みがあれば、余り教義に関わることなく救われ方が多いのではないかなという気がします。

それから、超宗派的な連携がうまくいっている要因は何かというご質問は、私もあまりはっきりは言いがたいのですが、宗法連が長い歴史をもっているといことは確かに影響あると思うのです。

実は、宮城県宗教法人連絡協議会のようなものが、他県でどうなっているのかいろいろ伺うのですけれども、たいてい宮城県のような関係は聞こえてこないのです。けんかしているよとか、あんまり仲良くないみたいだよといった話は聞きましたが、県単位の宗教団体が、きれいにまとまって共同で何かをするというお話はあまりないと。そうなりますと、宮城県はそれを長年やってきて、みんなで何かしようということを考えてきた伝統は、一つ、大きいのかなと思います。

そのなかで葛藤はというお話もありますが、実はあります。これは、先ほど申し上げたように、人を救えない宗教学者が、人を救う宗教者をコーディネートしているわけですね

ど、そのために、すごく苦勞している部分があります。というのは、やはり、飛び出す、突出する教団もあるのですよね。もう、走りたくて、走りたくて。まずそのような教団の動きに時には足止めをすることがあります。またその逆に、死者の弔いを超宗派的に行うことにあまり積極的でない教団もあるのです。関係者の方がいらして気を悪くされるといけないのですが、神道の反応が、死者の弔いに関しては他の教団と比較して相対的に遅いのです。大変申し訳ないのですけれども。

○鎌田 わたしも、関係者ですが・・・。

○鈴木 ああ、すみません。ただこれは、裏を考えるとよく分かるのですね。つまり死者に対する対し方は、神道は、一般には＜群としての死者＞が得意なのですね。＜個としての死者＞にはあまり大規模には対峙されていないのです。

ともかく、宮城県においてはそもそも、神葬祭が少ないのですね。ですから＜個としての死者＞と対峙する機会はそれ程多くはないのです。それに対して、英霊のためといったかたちの、＜群としての死者＞を取り扱うのは、神道はすごく得意でよくやって来られたし、伝統があると思うのです。ですから今後次第に顕在化してくると思うのですが、震災死者をまとめた形で慰霊する場合は、神道として既にやっていらっしゃるしこれからもやられると思うのですが、この震災でなくなった個人の弔いをするのは、それが神葬祭の人でなかったならば、やりにくいのかもしれません。

とはいえ宮城県神社庁も、今回の震災に対して多方面からいろいろなところで被災者の支援に当たっていらっしゃいます。「心の相談室」賭しての活動に、宗法連の各教団が共に歩調を進めることができることを実現したく思っております。

ちょっと余計な言い方で、気を悪くしたら、そういうつもりじゃないので、どうぞご了承よろしくお願ひします。宮城県神社庁も、今回の震災に対して多方面からいろいろなところで被災者の支援に当たっていらっしゃいますので。

次に行政との連携の話ですけど、「こころのケアセンター」が宮城県につくられることになっています。ただ、ここは、医療と臨床心理士の方がメインで、実は、宗教者が入っていないのです。入っていないのを、何とか、「実は、関係する」というシステムにしようというのが、岡部さんの狙いです。岡部さんは、「心の相談室」もいずれそこへデータとかをお出しタイアップできることを考えられています。

その一環として「こころの相談室」の方では、宮城県内で宗教団体がどうかたちで関わっているかのデータベースを、現在制作中です。各教団ではいろいろとでつくられています。ただ、地元の小さな村まで入って、どこがどうしているという辺りまでになると、教団本部と言うよりやはり地元が動くしかなないので、ちょっとそれをつくっています。それで、あと、ちょっと最初の、宗教者ならではということ、余計なことで考えると、私は、今回被災された地域の中に、ずっと昔から調査している所が何カ所かあるのですね。

南相馬がそうですし、相馬がそうです。私のフィールドの中には、地域の3分の2ぐらいの方が流されたという所もあるのです。

そういう、昔お祭り調査のために何泊もしたような所で人が亡くなっていることがあって、そういうところの人々と話すと言うことは、実は、宗教民俗学的なフィールドワークをするということが根っこにあるのですが、長年入っているがゆえに、結局は早い話、いい傾聴を行っているような気がしております。いい傾聴と言うと変ですけども。

つまり、長年入っていたフィールドですよ。家族構成とか、もっと言うと、社会の構成も分かっているわけですよ。そういう所の人と話すと、やはり、バックグラウンドが分かった上での話ですから、傾聴のつもりでなく調査のために話であったにもかかわらず、そこで話をすると、話し相手は結局何かすっきりされたようなところもあって。あ、傾聴と一部通じるところがある。つまり、フィールドワークというのは、長年行っている所に限って言えば、長年の調査地で調査することが、結果として傾聴になっているといった思いを強くしました。聞き取り調査は、人と人との間でいい傾聴ができる基礎、基盤を持っているということなのでしょう。

それから、井上ウィマラさんの方のお話で、僕が先ほど投げかけた今後の問題、祖先祭祀ですね、やはりすごく良いヒントを頂きありがとうございます。確かに家系図をつくり直すなどといった課題は、残された人々の気持ちを整理していく際の大きなきっかけになると思いますね。それは素晴らしいと思います。そういうなかでやっていくことは、たぶんすごく有効だと思いますので、チャンスを見て試してみたいと思います。

井上さんはちらっと、遊びとしてやってもいいと言われましたけれど、実は、この遊びとしてという部分、「心の相談室」全体が、先ほどから **Café de Monk** がちょっとおちゃらけた感じでやっているところがあるんだと言いましたけれども、あれがいいと思っているのです。つまり、「心の相談室」の運営をしかめっ面をして、必死になってやっていたって、こんなの絶対地元には受け入れられませんよね。やはり、ちょっと遊び心。まさに先ほどの金田諦應さんのさまざまな遊び心を持った被災地の人々との交流は、素晴らしいものと思っております私にとっては、今回の震災を契機にあの人と出会ったのは、一つのいい宝物だと思っているのです。あのお坊さんは、もう本当に、こっちが一生懸命真面目に話していると、ぼろっと外すような、そういうような会話を平気でやってくる人なので。やはり、真面目にやることは必要なんだけど、生真面目だけがいいわけではなくて、遊び心を持った行動が、たぶん地元の方にもすごくいいのだろうと。

そして、井上さんがおっしゃったように、祭り文化から地域の再興をする。これはたぶん、地域の人が一番入りやすい方法だと思いますし、その辺、いま宮城県では、特に神楽関係では、レスキューの方も多数入っているようですので、たぶんそういった活動が、一つの大きなきっかけになるのではないかと考えております。

質疑応答&討議

○鎌田 ありがとうございます。では、皆さま、いかがでしょうか。所属、お名前を言ってからお願いします。

○高木明彦（大本） 座っていいですか。神道と言われたので、その範疇に入っているかどうか分からないですけど、教派神道の一つの、大本という例なのですけど。

例えば、震災があったときに、死者と、残されている犠牲者で、病を抱えたり、それこそPTSDにかかっていたり、いろいろ心理的な悩みを持って生きている方。同じ東北でも、よそ事のように、自分のところは被害を受けなかったような感じで、それで救われたような感じで生きている人達、いろいろあると思うのです。

私は、宗教者と定義されると、果たして私は、宗教者として生きているのか？人生の半分以上は、むしろ市民とか、俗世に生きている方が日常的なので、その定義のなかには当てはまらないと思うのですけれど。

震災は、死者だけを突出して祭って、それを慰霊することだけでは、私たちは、総合的な救いが達成されたとは思わない側におり、そういう教風というか、風土で育っているのです。

極端に言うと、それは永遠の課題なのですけど、やはり、こういう震災が起こらないようにしたい、また、震災が起こった場所が復興して、ある意味では、物質的に素晴らしいものが回復するという意味だけではないのですが、前よりも、共同体的な仲間意識や助け合いの、そういう村型の大家族的社会だとか、村でなくても、いま失われている絆という言葉、そういうものが高まる集落、都市が復興して、初めて死者の弔いも完結するのだと。これは、ちょっとした変化球かもしれません。申し訳ないのですけれど。

しかし、まあ、それは置いておきまして、実際に、宗教祭礼、祈り、葬式。命日だとか、亡くなった方の、この後10年、20年とあろうと思いますので、そういうことを踏まえて思うときに、一つ面白いのは、被災者は、宗教の種別を選んでいないということを教えていただきました。

大本であろうが、キリスト教であろうが、何か本当に真剣に取り組んだり、この人なら本当の悲しみを語れると被災者側が判断したときに、初めてわれわれは宗教者と言えるのであって、勝手にわれわれが分類的(?)に、自覚として持つのは重要なのですけれど、宗教者までいっていないのではないかという、反省を非常に厳しく抱いています。

○鎌田 、ありがとうございます。いまのは大本の高木さんです。では、鈴木さん、お答えください。

○鈴木 ありがとうございます。私の言い方がまずくて誤解されてしまったならまずかつ

たのですが、先ほど私が神道と言ったのは、いわゆる神社神道のことでした。いわゆる教派神道をイメージしてお話ししたわけではないのですね。

震災の問題が死者の慰霊だけではないというお話も、そのとおりだと思います。こうした問題もたぶん、私がさっき言ったグラデーションで考え、どこら辺のことで言うかということと言えることではないのかなと思うのですね。

差し当たって、われわれが考えているところでは、まず死者の問題を考えるのが当面の課題で、そこを切り口にしてその後は、濃さを変えて動いてということになるのではないかと思います。

また被災者は宗教を選んでいないというのは、本当にそう思います。ですから、具体的に言うと、やはり、キリスト教の方が何か祈っているときも、皆さん、こう、一緒に手を合わせたりはしているのです。先ほどのクリスマスパーティーの写真ですけれど、牧師さんがお話しされたときに、それで、最後に祈りましょうと言ったときに、大半の人々はプロテスタントの信者ではないはずですけども、大概の人が手をこうやって、祈っていたのですね。だから、日本人は、そういうような異教のしぐさをやるということを、それほど大きな壁と考えないのだと思います。

そういう意味で言うと、宗教を選んでいないということはあるのだと思います。でも、最終的には、鍋島先生の葬式の司祭でお話ししたように、やはり、本当に気持ちがあるかどうかというのは、被災者はよく見ているということですね。

ですから、被災地にはいろんな教団が入って来たのですけれども、被災者ということで避難所に入り、布教活動に励んでいたなどに行った困った問題も起こっていました。出ていってもらおうとすると、自分は被災者だから避難所にいる権利があると言って出て行くことを拒んだりしたそうです。

○鎌田 井上さん、どうぞ。

○井上 死者だけでなく、復興というテーマに絡んでですけども、トラウマ関係の研究で、ポスト・トラウマティック・グロースという概念が出てきています。トラウマの後で、そういう大きな出来事の後で、ふさわしい、適切なケアを受ければ、それはその人の魂と言いますか、存在の成長につながるという視点です。

現実にはその反対に、個人やコミュニティ全体が腐敗してしまうような場合もあるわけなのですけれども、災害ケアの研究からはPTGもありうるということです。それに対応できるようなかたちで、宗教者は、これまで宗教が行ってきた宗教的ケアが魂の危機と成長にどういうふうに寄与してきたのか、そこで儀礼はどのような役割を果たしてきたのか、そうしたことをちゃんと説明することが必要だと思います。

PTGのなかで大切なのはエビデンスですが、その中核にはレジリエンス（修復可能性）とスピリチュアリティが大きな柱になっています。宗教がそこで発言するのは、とても

有意義なことであり、必要なことだと思います。

そのときに、例えばPTSDの症状と言われるような幾つかの状態があって、それを確かめるために医者さんや研究者が喜ぶような、質問の仕方、報告の仕方があります。そういう手法を宗教者も上手に使って、自分たちの具体的な宗教的ケアのなかで、こういう話が出てくるのですが、それはこういうふうに語られていますというふうにしてゆくのです。そして、こういうふうな見方の転換ができると、こういうふうに変わりますということ宗教者が答えられるように、エビデンスではないですけども、そういうものにも対応できるようなあり方につくり変えていくことで、PTGという概念を通して、医療と宗教が新しいつながり方を見出す可能性は十分にあると思います。

○鎌田　そういう面では、いま鈴木さんが話された、「臨床宗教師」が、心理学や精神医学やほかの宗派のことも含めて、幅広く宗教儀礼全般を考えることができたならば、今の問題に対してもっと適切に対応することが可能かもしれません。他にはいかがでしょうか。

○熊谷誠慈（京都大学助教）　「白眉プロジェクト」の熊谷と申します。非常に興味深いご発表で、大変勉強になりました。1点、一つ気になった点が、超宗派と仰る場合に、宗教の壁を超えるという超宗教なのか、あるいは、同一宗教内の宗派の壁を超えるという超宗派なのかというので、分かりにくい部分もありまして。

実際、例えば、先ほどのお数珠を取られなかった方が、カトリックなのか、或いはプロテスタントなのかという点で何か違いがあるのかとか、あるいは、仏教の場合だと、普段は文句言い合いながらも、こうした危機的状況化になると、くっと、いわゆる、超宗派で結束する場合があると思うのですけれども、それが、先ほどの、神道と仏教という異なる宗教間でどうつながっていくのかという超宗教的な点に関しましては私もまったく分かっておりませんし、お聞きしたいなと思います。

あと、先ほど、神道の側が、いわゆる、群れの死者に対しては効果を持っているという話で、ああ、なるほどなと思ったのですけれども、逆に、仏教の方は個に対してある程度強いのかなと思ったのですが。

また、仏教は瞬時的な局面に対しては強いかなと思うのですけれども、神道は、割と継続的な強さがあるのかなと。例えば、最近法事とかなさる方が、だんだん減ってきていると思うのですよ。三回忌、七回忌、十三回忌と、昔の方はされていましたが、最近はまだ、どんどん減ってきて、一周忌で終わりにしますという方が増えてきていると思うのですけれども。

それに対して、神社には、「去年お参りしたから、もう来年はいいです」と言う人は、やはりおられずに、ずっと毎年毎年皆さん行かれるという、何か継続的な力は持っておられるような気がします。

例えば、何か神道が震災復興にリアルタイムでコミットしにくい点があるならば、必ず

逆に、何かの面では神道が持つ強い部分があると思いますので、その部分を足並みそろえて、仏教も神道も同じように、同時に何かをするというよりか、お互いの長所と、ある意味では短所とかいう部分を、うまくどう差別化しながら進めることができるのかという点については、非常に興味があります。

○鈴木 ありがとうございます。まず、超宗派の話からです。この用語は、最初に言っちゃったから、そのまま言っているというところが、正直言っています。なぜならば、実は、超宗派と言うときには、超教派とか、そういうつもりで言っていたりしただけではなくて、神道、仏教、キリスト教、イスラム教、そういった、個別宗教を越えてというつもりでもあったのです。

あったのですけれど、今度、超宗教と言ったら、宗教現象を超えたものというふうに考えられてしまう。そういう読み方もできますよね。超宗教という言葉は、そういう意味で、使ったら、「宗教を超えた何をやっているんですか」という話になっちゃっても困るので。

実は、最初の頃から、われわれのなかで、超宗派という言い方で言ってきて、宗教、各教団を超えたとか、教派も超えたというつもりも、だから、宗教法人も超えたと言いますか、そういうようないろんなレベルを含めてのところ、何となくごまかしているのが正直なところなんです。

あらためて考えると、超宗教って実は使いにくい言葉なのですよね。ということにもなります。ですから、ちょっと痛いところを言われているのですが、では、いい言葉はあるかなと言われると、いますぐはちょっとなかなかできないところで、勘弁してください。

それで、仏教が刹那的、神道が継続的な力があるというのは、そういう言い方も、もちろんできるかと思います。たぶん、一つは、神葬祭を選ぶというか、神葬祭をやっていく方が非常に少ないというのがありますよね。やはり、ちょっと、そのところは大きなことで、これは、近世から現代の日本の宗教史の流れのなかで、そうってしまったというのも一つ、あるかと思います。

それと、もう一つ、これは私の個人的な意見ですが、仏教の、いわゆる、弔い上げというのは、さっきも言いましたかね、すごくいい装置なのです。33年、50年、そこをたったら、あとはもう個別に故人のことを弔わなくて良くなるのですよね。そのイエの先祖代々にはいるわけだから。

つまり、仏教の弔い上げという装置を経ることで、「先祖代々」の位牌を祀っておく限り、個別死者の弔いとして特別なことはしなくて良くなるのです。タロベイさん個別のは、もう三十三回忌で終わってもいいわけですね。ところが、私が気になっているのは、戦死者です。戦死者は、いまずっとそのままです。お墓もずっとそのまま。だから、戦死者、とりわけ、第2次世界大戦のときの戦死者なんかの場合、われわれはよく目にするのだけれど、いつまでどこまでやるのかなということが、すごく気になる場所ですね。

だから、そこは、仏教はうまくやっているなと思うのですね。先祖代々があれば忘れてないのですもん。忘れてないのだけれども、個別の死者の弔いはやらないでもすませるシステムをつくっちゃっているわけですよ。でも、年限の起源を設けないという、継続的な力というのは、逆に、力と言っても、プラスの力じゃない場合も出てくるのかなという気はするのですね。

この辺りちょっと神道の方もいま、神葬祭をいろいろ考えていますね。各県の神社庁レベルでもやっていますし、本庁のところでももちろんですし、いろんところで神葬祭をどういうふうにすべきかを検討していますが、この辺りはやはり難しい、よく分からないところなのかなという気がします。ちょっとこれからも考えてみたいと思います。ありがとうございます。

○鎌田 そろそろ時間がなくなってきたので、ここで、前半の発表を締めくくりたいと思うのですが、最後に私の方からコメント的に感想を述べたいと思います。

まず、フィールドワークをしていた人がいい傾聴ができる可能性があるということ。本当にそれは重要点ですね。救えない宗教学者が救える可能性をどこかで持っているということは救いですから。

私はこの30年、天河大辨財天社に通ってきました。3月11日に東日本大震災があつて壊滅的な被害があつたのですが、9月3日・4日に天川から十津川・熊野川流域が台風12号の影響によって非常に大きい被災を受けて、森林も深層崩壊したのです。

私は天河にもう30年近く通っていたので、鈴木さんがおっしゃっているように、天河の土地の人たちと次の段階の結びつきというか、話ができるような状況が生まれました。

そういう意味で、いいフィールドワークかは別にして、長年通っていることが次の段階へ踏み込むきっかけになることは間違いなくあると思います。そのときに、宗教学者や研究者といえども、研究を越えてより実践的な立場に立つことが可能なのではないか。この天河大辨財天社について、かつて私は、気功家で評論家の津村喬さんと共編で『天河曼陀羅——超宗教への水路』（春秋社、1994年）という本を出しておりますが、ここは今日のパワースポットブームの発祥地であり、超宗教・超宗派のモデルの神仏習合神社です。

ともかく、フィールドワークや傾聴という観点からも、東北大学に寄付講座で実践宗教学の講座ができることをこころから願っていますし、高野山大学のスピリチュアルケア学科にももっともっと頑張ってもらいたいところでもあります。それが一つ。

それから、第二に、神道についてですが、国学神道にも本居宣長の神学と平田篤胤の神学の二つの系統があつて、本居宣長は、言ってみれば、昼間の神道。昼間の、天照大神や皇室を中心とした神道です。そこでは死後の世界を基本的に問わない。この世の次元の問題を中心に考える。それに対して、出雲大社とか、平田篤胤の神学は大本にもつながっていきますが、夜の神学、冥界・霊界・月の神学です。

この平田篤胤の系統は、死後の魂の鎮まりなくして大和心の完成もないのだという立場

です。この流れをもう1回、震災以後考え直すことが、私たちの神道のサイドにいる人間にとって重要になります。つまり、夜の神道の文化や流れをもう1回再検討することが課題なのです。

いま、鈴木さんのいろいろな発表を通して、「心の相談室」という具体的な超宗派の活動が実際の民間信仰との間のどういうグラデーションのなかでこれから先どういう課題を解決しながら、また発展させながら取り組むことができるか、一つのモデルケースとして、「心の相談室」自体を研究対象にしてもなかなか面白いかもしれないとも思います。

そういう意味で、いろんなレベルの研究が、これから考えられていかななくてはいけないのではないかと考えています。それこそが、先ほど井上さんが言ってくださった、スーパーバイザーの在り方ですね。いろんな次元にアースする、抜いていくレベルを持つことによって、われわれの世界がもう1回リサイクルし、循環して、いい空気が流れることができる。

東北大学や東京大学や、東京や京都や大阪で行っている研究とか、いろんなものが息抜きをして、気を流していくことができたならば、こういう研究が持っている可能性ももっと先へ進んで連携していくことができるのではないかと。そういうことをこの震災プロジェクトとしては望んでおります。

では、10分間の休憩の後に、金子昭さんの発表、「宗教的世直しの問題」に移ります。そして、最後でもう1回、総合討論的な時間を持ちますので、そのときに、鈴木さんの問題についても、再度コメントなり、意見なりを言っていただければと思います。休み時間の間に、どうか、大槌町のサンガ岩手の方たちがつくった手芸品をぜひ手に取って見ていただき、また、購入支援などしていただけるとありがたいと思います。

第2部

○鎌田 それでは、そろそろ第2部を始めたいと思います。天理大学おやさと研究所教授の金子昭さんにより「宗教的世直し思想について」という表題で発表していただきます。よろしくお願いいたします。

発表2 「宗教的世直し思想について」天理大学おやさと研究所教授 金子昭

ご紹介いただきました、天理大学おやさと研究所の金子と申します。

先ほどの鈴木先生のお話は、非常に臨場感あふれたものでした。やはり自らも被災地におられて、被災者の方と常に関わりつつ、ご自身も支援を継続されているご様子がありありと伝わってまいりました。

私自身は関西の人間ですし、ここは関西です。関西にいるということは、東北の被災地とはやはり距離感がどうしてもあるわけです。私たち関西の人間も、できれば被災地に行って何か支援をしたいという気持ちは強いけれども、なかなか行くことができない。しかし気になる。この距離感というのは、単に物理的なものだけでなく、関西と東北の間の文化的・民俗的な意味でのものもあり、鈴木先生のご発表からそれを感じてもあります。それで、私の発表は中立的な意味で申し上げるわけですが、被災地からワンクッションを置いたこの関西という地域の中で、震災後一年近く経ったこの時点で、宗教者として何が考えられるのか、また何ができるのか、ということについてお話ししたいと思います。

私が今回、「宗教的世直し思想について」ということを取り上げたのは、震災から1年近く経過して、緊急支援という段階はひとまず終えている現在、宗教者の思想や行動は、その後どこに向かおうとしているのか、ひとつ見極めてみたいという思いがあるからです。

もちろん、被災地への支援活動そのものは、先ほどの鈴木先生のお話ではないですけれども、常に現場密着型で、今後かたちを変えて進められていくのは確かです。宗教者たちは今回の支援において、阪神大震災以上に大きな活動をしてきた。そのときに、「自分たちもこういうことができたのだ」、あるいは「こういうこともできるのだ」という宗教が持つ潜在的な力と言いますか底力について少し反省的に考え直しつつあるようにも見えるのです。私の発表は、そういう意味であまり臨場感はなく、むしろ宗教哲学的にちょっと理屈っぽい話になるかもしれませんが、あらかじめお断りしておきたいと思います。

天譴論でも神義論でもなく

まず最初に、震災に際して、わが国の宗教者はどう判断して、どう動いたかということを考えてみたいと思います。東日本大震災が起こったときに、わが国の宗教者は、私が知る限り、明確なかたちで天譴論だとか神義論というものを打ち出さなかった。あるいは打ち出せなかったようにも思います。

大きな災害が起こったときに、われわれはどうしても、そこに何か意味付けをしたくなります。プレートが衝突して、こんな大津波が起こったという科学的説明だけでは、どうしても満足できない。何かもっと納得したいという思いがあるわけですね。

納得の二つの型として、天譴論と神義論というのがあります。どの宗教においても両者の傾向があって、あるいは宗教的立場をはっきり取らない人であっても、天譴論的、あるいは神義論的な考え方を表明する方がいます。

天譴論というのは、ご存じのように、蓄積された人間の過失が、享楽主義とか、我欲とかいったものが神仏の怒りを招いた結果、このような災害が起こった、つまり天罰を食らったという考え方です。しかし、そのようなことを今さら、したり顔で説かれても、どうにもならないところがあります。宗教者がそんなことを言うなら、なぜ予言できなかったのかと、かえって責められるかもしれません。それに天譴論は、それ自体、もともと後ろ向きの因果論の文脈で説かれているということもあって、説けば説くほど人々を意気消沈させるという性格を本質的に持っています。

もっと問題なのは、天譴論というのは、自然災害と人的行為との関わりに対して、最も安易で傍観者的な解釈ではないか、ということなのです。つまり天譴論を説く人は、当事者として現場にいないのです。自分に関係ない。だから説けるわけです。そういうことを念頭に置き、天譴論を最も説いてはいけない人がいるとすると、それこそ宗教者ではないかと私は思うわけです。

これに対して、神義論（弁神論）というのがあるわけですがけれども、このような大きな苦難が起こったのも、万能で自然な神仏による深い思惑があるのだというわけです。これには客観的なタイプと、主観的（主体的）なタイプとがあって、客観的なタイプというのは、よく言われるライブニッツ流の予定調和説がその典型的な例になりますけれども、さすがにこれでは人ごとのような感じがするので、いまはもう少し深められた主観的（主体的）なタイプの弁神論を見聞きすることがあります。

それはこういうものです。大災害は人間にとっては大きな不条理であって、どうしてこんなものが起こってしまったのだろうか。いや、これもまた人間（人類）を正しい方向へ導くために下された大きな鉄槌に違いない。やはり神仏の慈悲として受け止めなければいけないのではないか、いやそのように受け取るべきだという考え方です。

でも、不条理を何とか理屈付けよう、納得しようという気持ちは分かるのですが、これでさえ、力づくで説明し、無理やり納得させようとするようになってしまって、実は説得力がない。ですから、多くの宗教者は東日本大震災に際して、実際、語るべき言葉を失ったはずで

現実の世界というのは、どんな宗教の教義であっても、性急な解釈を拒む手ごわさを持っておりま

実際、多くの宗教者たちは、いや宗教者でなくても多くの人々はそう思って、大災害の報道に接するや、直ちに立ち上がり、被災地の支援、あるいは後方支援に自らの在り方を定位したわけです。これは正しい方向性であったと思います。

ここから言えることはどういうことかということ、宗教をはかる究極の尺度は、天譴論であれ、神義論であれ、世界を教義的な解釈で理屈付けることではなく、むしろ、その宗教が人間をして、いかに生き生きとして倫理的な実践活動に促すかどこにあるということなのです。

自分の実践を後ろから後押ししてくれるものがある、あるいは存在があって、これを自覚的に認めるのが宗教だと思うのです。ですから、理屈ではたとえ納得できなくても、頼るべき存在がそこにいることを直感する立場、それが宗教ではないかと思うわけです。

拠って立つべきは、私たちの内側に感じるところの超越的な存在者（神仏）であって、苦難や孤独の中にあってこそ、この存在者が臨在することを特に痛切に感じられるものです。どんな危機にあっても、自分が何らかの神仏と共にあると自覚しているとき、私たちは確かな地盤の上に立っていると感じるができるわけです。

それゆえ、私たちがなすべきことは、神仏の臨在の下に生きているということを実感しながら、人間として直面する難問を粘り強く解決していくこと、これなのです。実際に宗教者が被災地で、さまざまな多岐にわたる活動を行っているというのも、実はその表れではないでしょうか。しかも、いわゆる宗教者と呼ばれる人だけではなくて、そういう実存的な潜在力は、実は誰もが持っていると思うのです。

人々はそうやって被災地に関わってきました。その中で、あれこれ問題に取り組んでいる中で、だんだん時間がたってまいります。被災地にも日常性がだんだん戻ってきます。そんなとき、これまで一生懸命、被災地のために支援をしてきた宗教者たちが、ふと自分たちが生きている世界というか、世の中全般にまなざしを向き直す瞬間があります。実は、そのときに「世直し」という観念が表れてくるのです。自分は今まで被災地救援にばかり目が行っていたけど、今自分がいるこの社会自体にだって、無縁社会とか格差社会とか貧困社会とか、いろいろな問題をかかえているのではないか。世の中、これでいいわけがない。なんとか自分たちの力で変革していくことができないだろうか。これが宗教的世直し思想として結晶していくのです。

私は、宗教的支援の活動の延長で宗教者自身が気が付いた宗教的世直し思想について、そうした意味をこめて取り上げた次第であります。

“世直し力”の本質は“宗教力”

世直しと言っても、では「世直しとはこれこれこうである」と、ポジティブに定義するのは非常に難しいところがあります。私は、むしろ、世直しとは何でないかというところから考えた方が分かりやすい気がして、あえて極端な対比で考えてみたいと思います。

これまでも、宗教が上から社会を変えようという動きがありましたし、いまもあります。

例えば宗教団体が政党を支持して、国や政治を動かしていこうとするのがもっとも分かりやすい例です。しかし、世直しというのは、そういうものとは違うものではないか。世直しが、草の根の人々から澎湃と巻き起こるものであるとすると、それと対極のものこそ、上からのトップダウンの改革ではないかと思うのです。

阪神大震災のときでも、東日本大震災のときでも、新たな宗教ブームとか、宗教教団ブームは起こりませんでした。おそらく今後も起こらないだろうと思われます。しかし、私は、代理現象あるいは擬似現象のようなものは起こっているような気がするのです。関西に住んでいるとよく分かるのですけれども、今をときめく人気政治家の橋下徹氏と彼の大阪都構想を見ていると、この現象などはむしろ宗教学の用語で説明した方が分かりやすいような気がするのです。

つまり、「大阪都」は橋下氏自身もそう明確な具体的設計図は持っていないし、まして一般の有権者にはよく分からない。よく分からないけれども、実現すれば全てがよくなるのではないかと、なんとなく思いこんでしまっている人がたくさんいます。つまり、一種の「地上天国」のようなイメージです。また橋下氏についても、彼は独裁者と言われていますが、そもそも独裁者というのは悪い言葉ですけれども、何となく肯定的な意味合いで使われるようになってきて、橋下氏こそが閉塞した大阪というか、関西を救ってくれる一種の「救世主」のように見られています。そういう雰囲気を感じるがあります。

しかし、私自身は、この雰囲気は非常に危ういと思っています。なぜなら、時代の閉塞感というものがあるにしても、このような上からの改革では決して突破できないと思っておりますし、むしろトップダウンの「改革」に過度に期待して人々が政治に受け身になり、かえって無力感と依存心ばかりが広がるからです。草の根の世直しも、このような上からの改革とは無縁のものです。世直しの担い手は、やはりどこまでも庶民というか民衆であって、民衆が下から自分たちの力で変えていくものだと思うのです。

現在、福島第1原発の事故を受けて、反原発運動が起こり、原発の是非を問う住民投票とかの動きが各地で起こっています（大阪でもありますが、それこそ民衆の自発的な動きにもかかわらず、橋下氏はなぜかそれを価値がないとして批判的に見ていますが）。この反原発運動とよく重ね合わせて取り上げられている人物が、明治時代後半の鉅毒反対闘争で知られる田中正造（1841-1913）です。

今からみれば時代的な制約などもありますけれども、田中正造の鉅毒反対運動の射程は、草の根の民主主義に基づいた常に絶えざる世直しの運動へと伸びていると思います。足尾銅山の開発も、原子力発電も、いずれも、お上が産官学の挙国一致で推進してきた国策でありました。それに対する真っ向からの反対運動なのです。

そのような反対運動に身をもって挺身しているのは誰なのかというと、これがまさに在野の人たちなのです。要するに民衆です。あてにならないのはまさにお上なのです。そして、在野中の在野たる者は、いったい誰なのかと考えてみたときに、それはまさに宗教者ではないかと、私は考えているのです。宗教者がそうした草の根の活動に関わり、その思

想が活動の精神的支柱になるとすれば、これが“民衆力”を発揮させる民衆宗教の力になるのではないか。政府の権力に同化しないで、自らは常に対抗する力であり続けるのです。

最近、「新しい公共」ということが言われています。私たち民間の者が主体的に言う分には問題ないと思うのですけれども、政府の方から言われたり、行政からボランティアも無償の労働力として使ってやろうという動きに対しては、常に警戒心を怠ってはいけないと思うのです。

実は、私は、田中正造のイメージでもって、宗教者のイメージを少し脱構築してみたいと思っております。宗教者というのは、肩書ではなくて生きざまであります。田中正造も確かに晩年はキリストの信仰を深めました。けれども洗礼はついに受けませんでした。彼にとって、なにより聖書に書かれてある精神で行動することが大切だったのです。

彼が鉅毒反対の拠点にしていたのは仏教のお寺でした。そこに事務局を置いて中央政府に「押し出し」を行う拠点としていたわけです。だからといって、田中正造はキリスト教者だったのか、仏教者だったのか、詮索しても大して意味がないと思うのです。

伝統仏教の例が鈴木先生のお話の中で出てきましたが、お坊さんたちも、別に悟りすました僧として行動をしているわけではなくて、聖（ひじり）のように民衆の中に分け入って活動しているように思います。

聖という言葉は、いわゆる職業的宗教者とか、在家の求道者との違いとか、あるいは伝統宗教と新宗教の違いとかも、あまり意味を持たないようにしてしまふところがあります。

宗教がかけがえのない一人一人の人間を大切にする限り、私は、それは真の宗教として、いずれも民衆宗教だと思っております。一人一人の人間を大切にすることは、一人一人の人間の内面性、つまり一人一人の心か魂を大切にすることです。もし民衆宗教が社会の構造を変えていくとしたら、一人一人の心の内面に触れることによって人間の内面的変革から行っていくものであらうと思われまふ。

その意味で、世直しもまた、内面性の変革に由来するものだと言えるのではないでしょう。世直しは、単なる生活改善の自力更生運動といったものではありません。このような宗教者イメージを敷衍して別な言い方でまとめ直してみると、次のように言えると思います。

つまり、超越的な存在とのつながりにおいて、内面性が豊かである人間が真の意味での宗教者です。うまずたゆまず人々のために黙々と尽くしている人は、自ら意識しているか否かを問わず、実は極めて宗教的な人だと思います。

そういう人は、活動への無限のエネルギーを得る火種を自分の内面において絶やすことがありません。だから、活動もずっと継続できると思うのです。

人間的エネルギーだけでやっていっては、やがて枯渇する。あるいは疲弊して力尽きてしまうということがあるわけです。けれども、宗教者は火種を別なところに持っている。それは常に絶やされることがない。この無限のエネルギー源は、先ほど出ました「アース」という言い方にもつながってきますし、あるいは「スーパーバイザー」の存在ということ

にも関係してきます。これがあることが宗教者の強みだと思うのです。

世直しの性格とそのイメージ

ここで、世直しの性格についても触れていきたいのですが、二つあると思います。

一つは、文明の転換という意味です。文明の転換と言っても、やはり人間の内面的な革新から生まれるものです。外面とか内面という対比については、社会心理学者のエーリッヒ・フロム（1900-1980）がうまく説明しているので、ちょっとその考え方を拝借して説明してみます。

現代文明およびその生活様式を、フロムは「持つ様式」の最たるものとして表現しました。ところが、大災害は、まさにこれらの人間の「持てるもの」、有形無形の財産を直撃してしまうわけです。

これらのものは皆、私という人間の外側にある存在ですが、それが全て剥ぎ取られて、いわば人間がホームレス状態になってしまうのです。そういうホームレス状態になったとしても、やはり私がいるという事実は残ります。それが、フロム流に言うところ「ある様式」となるわけです。

私という人間の中心は、どこまでも私自身の中であって、ある意味、自分の外側にあるものを剥ぎ取られたら、内側のものへ目を向けざるを得なくなるという側面もあります。「ある様式」というのは、私の内側から湧き上がってくる人間的な力であって、それに即して生きるということです。

フロムは、これを「生産的能動性」という言葉で表現しているのですけれども、まさにそれは、私という人間が「ありたい」という、実存的な自己実現の意志にほかなりません。

またその達成には、心中深くから喜びが必ず伴ってきます。これは、フロムの言い方をそのまま使って言うのですが、「持てるもの」が全て取り去られても存続する不朽の「いのち」であります。

突如として出現する大災害は、人間の「持つ様式」を激しく揺さぶりました。「持つ様式」と「ある様式」というのが、実は人間にとって実存的な意味で、二者択一の可能性であるということがここで分かったわけです。このとき、「ある様式」における「生産的能動性」を超越的存在に由来する普遍的な救済意志の表れとして自覚するのが、宗教者のあり方です。

ちょっと難しい言い方をしてしまいましたけれども、「生産的能動性」というのは、内側から湧き立ってくる力と言いますか、エネルギーを一つの火種にしまして、それが、自分だけではなくて、自分以外の存在をも生かしていこうとする大きな意志として自覚するということです。そういうことができる存在が宗教者だという位置付けなのです。

そしてもう一つの世直しの性格ですけれども、それは「谷底せり上げ」という意味です。この言葉は、天理教教祖の中山みき（1798-1887）の言葉ですけれども、ここで民衆宗教と草の根民主主義との関わりが出てくると思うのです。

「せり上げ」という言葉ですが、歌舞伎などで、役者が舞台の上に、いまは機械を使っていますが、下の方から上げられる仕掛けのことです。それと同じように、社会の周辺や谷底にいる人たちが社会の表舞台にせり上がっていく。

ここには、最も低い立場に置かれた人々と同じ目線に立っているということが指摘できます。周辺や谷底にいるというのは、いわば社会から排除されている状態ですけれども、それが社会の表舞台にせり上がる。つまり社会の中へと放出されて、自らがエンパワーされていく。それによって社会変革の一翼を担うことができるのです。そこからこの世の高いところに向かって逆流を起こす。これが世直しになるわけです。

幕末維新时期には全国で世直し一揆や打ち壊しが頻繁に起こりましたが、そういう極端なカタチではないにしても、人々が自分たちの力で世直しをしようとして立ち上がってきた歴史があるわけです。時代は変わっても、その気概は私たちの中に伝わっています。これこそ、草の根民主主義というものであって、そうした気概を自ら身をもってなし得るのが在野中の在野的存在である宗教者ではないかと思うわけです。

ここで、少し視点を変えて、世直しのイメージについて、日本語から見ておきたいと思います。「世が直る」ということには、生命力が更新され、充実されていくことが含まれています。

小林一茶の『おらが春』の中に、「稲妻やひと切づつに世が直る」という句があります。稲妻が、ぴかりぴかりと光るたびにイネの作柄がだんだんよくなる。このありさまを形容するのに「世が直る」と言っているのですけれども、生命力が更新されて充実していくという、このイメージは、中山みきの『みかぐらうた』にも反映されているように思われます。

『みかぐらうた』の一下り目の中に、「四ツよのなか」とあります。これは「よのなか」ですから世界という意味もあるのですけれども、大和方言では「豊年満作」、つまり稲の生命力が充実して大きな収穫を得たありさまを言います。手踊りの形も、「勇みの手」といって勇んだ手で前進していくあり方で表わされています。

同じくその二下り目のところに、「三ツみにつく、四ツよなほり」とあります。ここで「世直り」が出てきます。『おらが春』では、「稲の作柄がよくなる」という意味でしたけれども、『みかぐらうた』の場合は、後の文脈と関係させていけば、「この世は立て替わる」という、より広い意味で解釈されるのが妥当だと思うんです。実際、手踊りの形としても、世界を見渡し世界を変えようとするかのように、足を一步前へ大きく出して、ぐるりと回るという、かなり大きなものです。

この後、「五ツいづれもつきくるならば」（どの者も、皆この道についてくるならば）、「六ツむほん（謀反）のねえ（根）をき（切）らふ、七ツなんじふ（難渋）をすくいあぐれば、八ツやまひ（病）のね（根）をき（切）らふ」と続きます。

謀反、難渋、病という三つの悪を断ち切る。こここのところが、具体的な内容として世直りの内容になってくるわけです。

誰もがこの教えに付き従うならば、神は、力強く積極的に、この世の謀反や難渋や病気の根を断ち切っていく。つまり、そういう積極的な社会変革的な内容を持っている。みきにおける神のメッセージは、明らかに不平等な世の中、さまざまな不幸せに満ちた世の中を変革していくことにある。そういうふうを受け取ることができると思うのです。

では、世直しはどういうステップを踏んで進められるか。どの宗教もおそらく似ていると思うのですが、先ほどから天理教の話をしているので、天理教の例で説明をさせてもらいますと、中山みきの直筆の『おふでさき』というものがあります。その中に、こういう歌が2首続けて書かれているところがあります。それは、人間の助け合いが神の救済を引き出すという場面です。

このさきハせかいぢううハいちれつに よろづたがいにたすけするなら 十二号 93

月日にもその心をばうけとりて どんなたすけもするとおもゑよ 十二号 94

上の「たがいにたすけするなら」の主語は人間です。その内容も、相互に助け合うという、人間としての助け合いです。下の「どんなたすけもする」の主語は神です（月日というのは神の言い換えです）。「どんなたすけもする」というのは、神ならではの助け、救済に当たります。となると、この二つの歌を合わせて考えると、人間がまず助け合いをすることで、そのたすけ心を神が受け取って神ならではの助け（救済）をするというステップを踏みながら、人間と神との共同作業によって世直しが進んでいくというように受け取ることができると思います。

どの宗教にもそうした“世直し力”というのがあると思います。それをどういうふうに発揮していくかで、その宗教の力量が問われてくると私は見ております。

“世直し力”の内には自由の“創造力”がある

苦しんでいる同胞や衆生の姿を見て、自分だけが安閑として生きていいのかという負い目の感覚は誰も持つでしょう。さらにそれは、自分に可能な責任を果たしていかなければいけないという、やむにやまれぬ思いとして表れます。被災地の現場をテレビで見て、もう居ても立ってもいられなくて、自分にできることは何かないかと動きだす気持ちです。

このような思いが、究極的には社会変革を促す希望の力になっていく。何か自分にできることをしなくてはならないという責任感を延長させていけば、そのような希望の力に至りうると思うのです。

では、その希望とは何かということです。哲学的な定義みたいになってしまうのですが、私は、希望というのは、未来を自分のところへ来させようとする現在の姿だと考えます。

目の前の困難な課題が解決され、世の中の苦難や不幸がなくなった世界を、われわれは未来のイメージとして持ちます。その未来をまさに自分のところへ来させようとする。そのいまの姿が希望だというわけです。この希望というのは、絶えず能動的で主体的なものであって、その意味では、受け身的かつ傍観者的な期待とは区別されます。

何よりも、この世の中のさまざまな問題に気が付いた私たち自身が、下からの民衆力で

自分たちを押し上げて、せり上げていかななくてはいけない。上から社会を改革してもらうことを待っていては何も始まらない。いや、むしろそういう受け身の姿勢が一番危ういと思います。

そうしたことをふまえ、宗教それ自体が人間を苦難から解放する自由の“創造力”を持っているというところを説明したいと思います。

私は、7月20日のシンポジウムの際に、本日ここにおられる関西大学の宮本要太郎先生が以前私に言われた問いかけを紹介したことがあります。つまり、被災地の人たちは大津波という、不条理に満ち、あり得ない現実遭遇しました。これは苦痛に満ちてはいるけれども、一種の超越体験ではないかというわけです。これはたしかにその通りだと思います。

ただ後になって考えなおしたのですが、なるほどこれは超越体験かもしれませんが、それはまだ宗教的体験にはなっていないと思うのです。超越体験が宗教的体験になるためには一つ条件があると思います。

その条件というのは、苦痛や苦難が確実になくなるという信念あるいはビジョンと言いますか、それをその人が持つかどうか、または持っているかどうかということです。これが宗教的信仰だと思えます。これを持っておりさえすれば、超越的体験が宗教的体験に変わると思うのです。

この宗教的信仰を通じ、超越的な仕方で救済の可能性を無限に羽ばたかせることで、過酷な現実を乗り越えることができるのではないかと。生存がいかに悲惨や苦悩に満ちていたとしても、それをこの現実に左右されない究極的な未来（あらゆる苦難から解放されているというビジョン）から、超越的に意味付けることができると思うのです。

あくまでも現実の認識は、目の前の悲劇を直視しているわけです。けれども、自分の中の希望あるいは意欲は、その悲劇を超えたところに置かれています。

どんなにこの世の現実に打ち砕かれたとしても、そのように自らの生を未来から超越的に位置付けるならば、それが新しい意味世界の経験になります。つまり超越的体験がここで宗教的体験になり得るわけです。その意味で、希望のビジョンを生み出す“想像力”は、人間を苦難から解放する自由をこの世に実際に作りだす“創造力”にもなり得ると考えてみました。世直し力には自由の“創造力”があるというのは、そのような意味です。

では、実際にこの世に創造すべきものは、いったい何でしょうか。私は二つ考えています。

まず一つは、この世における善の循環というものであります。

現代の聖ということ为先ほど申し上げましたけれども、この世にあつて、この世を超えた境地から、この世に自由に関わる存在、それが聖だと思えます。そうした姿勢を自ら示すことによって、宗教者は、従来の地縁、血縁を超えた「宗教縁」と言うべき縁で人と人をつないでいくことができるのではないかと考えるのです。

それは、通常の意味での支援というよりは、むしろ縁を支える「支縁」、つまり人々に寄

り添って、人々の縁を支えていく営みです。宗教者の役割は、人々の間に分け入って、人々の縁づくりのために力を貸していくことにあるのではないか。そうして縁を支えられた人が、今度は別な人の縁を生み出し、自分はその人の縁を支えていく。それが善の循環です。この言葉は実は、後で紹介する台湾の慈済会でよく言われる表現ですが、このようにして、人々の間に助け心を喚起し、人間相互の助け合いの世界を現出させていくことが、宗教者による草の根の世直しの一つのベースになってくるものではないかと思うわけです。

もう一つ創造すべきものとして、これは言葉としては硬いのですけれども、精神（霊）の共同体であります。私は、宗教縁で結びついた人々の集まりという意味で、精神（霊）の共同体という言葉を使いたいと思っています。

この言葉そのものは、ベルジャーエフ（1874-1948）というロシア出身の宗教哲学者に由来するもので、精神（霊）に目覚めた人格、つまりこの世を超えた何者かに、自分は確かにリアリティーを持ってつながっているという感覚を持った人間が、自分と同じような思いを持った者と自由な良心に基づいて形成する関わり、ソボルノスチのことです。

たとえ信仰対象や教えが違って、宗教者同士の間にも、一種の精神的、あるいは霊的な共同体は成立し得ると思います。自分たちがそれぞれの宗教を信じているところから、その象徴的表現形態は異なっても、それぞれに神仏の超越的存在につながっていることに由来する精神（霊）的、スピリチュアルな連帯感があるからです。

さらに言うと、宗教に所属しているか否かにかかわらず、何らかのスピリチュアリティに目覚めて、そういう人たちが、人格相互の自由な交わりを行っている場においては、どこにでも精神（霊）的共同体が成立すると思うのです。

今スピリチュアルという言い方をしましたが、これはいわゆるスピリチュアルブームの現象でいうスピリチュアルとは、ちょっと違うと思います。つまり、精神（霊）的共同体とは、自分だけで自己完結しないで、自分から交わりをつくり出し、関係性を広げていくイメージです。ですので、スピリチュアルブームのような個人化とか、癒やしというのとは違うのではないかと考えております。

慈済会における善の循環とその課題

このあとは、今述べた善の循環という点において、無縁社会を突破することを目指している一つの宗教団体のお話を紹介したいと思います。世直しの観点から見た、一つの宗教の動きとして聞いていただければ幸いです。

台湾に本部がある慈済会（財団法人仏教慈済基金会）という団体があります。これは、会員が 500 万人いる世界最大の仏教NGO団体でありまして、この教えの中に、実は明確に無縁社会の解決を目指す理念が含まれています。その理念の下で、積極的な実践を行っている社会参画型宗教と位置付けることができる団体です。

どういう理念があるかという点、非常にシンプルなもの。「無縁大慈、同体大悲」という言い方を彼らはよくします。無縁大慈というのは、無縁の者にも大きな慈しみをかけ

る大きな愛のことです。同体大悲というのは、同じ体であれば、どこが痛んでも自分の痛みとして感じるということです。手の指ひとつ痛くても、それは自分の痛みだから、自分自身が痛いのです。同じように衆生の苦しみを自分の痛みとして受け取りなさい、というわけです。

このモットーの中に、無縁を有縁化する思想が語られていると考えることができます。そういう実践を行う人は皆、人間菩薩だと言います。

仏の目から見れば、人間的には、たとえ無縁の者であっても、仏の大きな慈悲で包めば、全てが有縁の存在になってきます。この慈悲は、儒教の仁愛、キリスト教の博愛、あるいは天理教の親心ともつながってくると思うのです。宗教の教義を越えたところで、それがつながっていくならば、善の循環からさらに進んだ精神（霊）的共同体、スピリチュアルな共同体（ソボールノスチ）まで行くのですけれども、実際はそこまでは行きません。

しかし、この精神を有するならば、誰もがお互いに関わりある存在であるということに気が付かざるを得ないわけです。慈済会の活動は、こうした基本理念に基づいた仏教ヒューマニズムの展開であります。

善の循環による無縁社会の突破ということを、慈済会は次のように理解しております。

たとえ悪い因縁、因果の連鎖があっても、自分のところでそこを断ち切って、善の縁につながり替える。さらに悪縁を良縁に転換することによって、人間世界が織りなす因縁因果の縁を、全体として善が循環するかたち、姿に変えていく。これによって、人間菩薩が再生産されているという言い方をします。

善の循環は三つの性格を持っております。

一つには、善の循環は菩薩ネットワークの展開という性格を持っています。自ら発心して菩薩道に目覚めた人が慈悲喜捨の実践を行えば、それによって多くの人が助けられます。その助けられた人が、今度は自分も菩薩道に目覚めて多くの人々を助けていく。助けられた人が発心して慈悲喜捨の実践を行っていく。このサイクルです。これが拡大再生産されていく。

これは、稲場圭信先生が新刊書の『利他主義と宗教』（2011年）という本の中で、「利他行ネットワーク」という言葉で表現されていたものと、ぴったりと重なるものであります。

二つ目には、善の循環は心の内面における循環的展開でもあります。つまり菩薩行の利他的実践を展開していくことによって、実践する者の仏性が磨かれていく。自らの仏性が磨かれていくなれば、なおいっそう菩薩行に励むことになるわけです。これは活動そのものにおいても、救援と救済が一体化した展開になっている姿と受け取ることができると思います。

自らの実践によって、それが修行というかたちを取って自らの心のケアになり、心が磨かれて、ますます実践も深まっていくということです。

三点目には、この循環過程は慈済会の拡大生産過程にも重なるということでもあります。善の循環が慈済会への活動へと人々を取り込んでいくことでもあります。しかし、ここで、

宗教が社会活動をしていく一つの大きな問題が出てまいります。つまり、慈済会の拡大発展がイコール善の循環過程そのものになってくると、精神（霊）の共同体からずれてくる側面も出てくるのです。

東日本大震災でも、慈済会は大きな義援金給付を行いました。慈済会は多岐にわたる大規模な救援を行ったのですけれども、その中でも最も大きなものは、昨年後半の半年の間で、25の被災地市町村の約10万世帯に、金額にして50億円を超える住宅被害見舞金を届けたわけです。これは、慈済会の人たちが、世界中の慈済のメンバーに呼び掛けて集めたお金です。

台湾全体では、170億円の義援金が日本に届けられたと言いますがけれども、この慈済会の50億円は、確か入っていないはずですよ。ですから、いかに慈済会の50億円という金額が桁外れに大きいかということが分かると思うのです。

その見舞金配布の現場を私も取材させてもらいましたけれども、被災者の方が、慈済会の簡易ユニフォームを着て、自ら募金を呼び掛けていました。助けられた人が助ける人になっているわけです。私たちは慈済会の支援を受けました、だから皆さん、いっそう支援の輪を広げるために募金してくださいということなのです。

慈済会は、被災地に自前で学校を建てるということも言っております。実際に台湾大地震の後に50校の校舎を自前の資金で建築した実績があるので、こういうことを申し出ることができたわけですけれども、いささか懸念があります。これも台湾で取材して気が付いたのですけれども、同会による建設をめぐって、やはり文化摩擦が起こっているのです。慈済会の創設者・現代表の證嚴法師をたたえるモニュメントが同会の建設した施設（学校や住宅群）の中に建てられているとか、法師の標語が至るところにあります。また慈済会の建設した住宅で、菜食主義が奨励されて、これに反発する声も台湾先住民の間から上がっています。

仮に日本で、慈済会に学校をただで建ててもらったという場合、もしかしたら、後々の教育方面において、教育内容にも慈済の精神文化を反映してほしいなどの要望あるいは指導が入ることもあり得るのではないかと。そういう懸念もあります。

慈済会は、非常事態に強い団体ですけれども、むしろ被災地が日常性を取り戻していったときに、慈済会の本当の意味での底力をもっと地味で地道な着実な仕方で発揮していくことが強く求められると思います。そうすることによって、世直しに結び付く民衆力というものをもっと効果的に引き出せるはずだと、私は思っています。

ソーシャルキャピタル（社会関係資本）には二類型あると言われます。つまり、対外的な関係性を構築する「橋渡し型」と、自分自身の独自性、固有性を保つ「結束型」の二類型です。

慈済会の活動は、今回非常に大規模だったのですが、慈済会だけで行われた、いわば孤立した活動であって、義援金給付でも群を抜いて金額が多いだけに、ほかの民間団体にとっては一種抜け駆け的なパフォーマンスにも映らなくもなかったところがありました。そ

の意味で、慈済会の善の循環も、今後は外に向かって、よりいっそう開かれたものでもあっていいのではないかと思うのです。

今後、長期的な支援が続いていくわけですがけれども、慈済会も一つのソーシャルキャピタルとして、「結束型」として自分自身の独自性、固有性を保ちつつ、どこまで台湾の団体として、日本の東北という異文化に対して共存共栄していくかという、その「橋渡し型」としての性格がいっそう強く問われてくるだろうと思われまます。慈済会の事例は、われわれが日本の宗教者、宗教団体の在り方を考えるときの他山の石になるのではないかと考えております。

私は、宗教や教団の別を超えた精神（霊）的共同体というのを世直しのイメージの先の方に思い描いています。これは、さまざまな宗教者が、それぞれの教えの違いを超えて、世直しをしていくときのつながりの在り方のイメージとして理解していただければと思っております。以上で発表を終わります。ご清聴どうもありがとうございました。

○鎌田 どうもありがとうございました。実は私は、自分の生涯の課題としているのは「世直し」で、それこそが一番重要な課題だと考えております。けれども、「世直し」とはいったい何なのかという問い詰めなくては「世直し」の押し付けであったり、「世直し」をしようとして逆に世の中が悪くなったり人間関係が悪くなったりするという事態や構造もいまままで経験してきたわけです。

そこで今回、東日本大震災が起きたときに「こころの再生に向けて」という研究プロジェクトを実施するときに二つのことに注意しました。

一つは、現場の声をきちんと聞くということです。それで、鈴木さんや、東京や大阪の方で、いろいろな支援ネットワーク化をしている島菌さん、稲場さん、黒崎さんたちの活動を聞くことができる研究会にしたいと考えました。

もう一つ、近世の終わりから近代にかけて起こってきた民衆宗教と言われる神道系民衆宗教や仏教系の民衆宗教の世直し的な運動とはいったい何であったのか、そしてその運動は今日なおどのように有効であるのかという課題をこの研究会の場で率直に議論し再検討したいと考えたのです。

そういう方向性を最初から決めていましたので、第2回目の研究集会には、最大の関心事の「世直し」の問題を日本の宗教史や宗教文化の諸相を踏まえながら、ここで練り直すというか、鍛え直し、問い直したいと思っています。

今日は、その最初のとっかかりを、天理教の背景を持つ金子さんに問題提起していただき、さらにここには金光教や大本の方々も来てくれているので、日本三大民衆神道系世直し宗教が、全員三揃い、三位一体で揃っているのです、その問題を論議する最強軍団であると思います。世直し問題とはいったい何であるのか、ぜひみなさんにお訊ねしたい。

もう一つ、スーパーバイザー的な役割として島菌進さんにお越しいただきました。島菌さんは若いころから天理教や金光教を中心に教祖研究をしてきた方なので、この問題をコ

メントしてくれるのにふさわしい人だと思います。では、島菌さん、よろしくお願ひします。

コメント 東京大学大学院人文社会系研究科教授 島菌進

今朝は授業がありましたので、早く来たくて、もう気もそぞろでしたが、しょうがなく、授業が終わってから駆け付けまして、新幹線の中で走ろうかと思ったのですが、それはあまり意味がないと思いとどまりました。3時過ぎにやっと来られたということです。

とてもこのお話が盛り上がっていて、すぐに自分も一生懸命話をしたいという気持ちになっております。本当に金子さんの話は非常に豊かで、言いたいことが、私もたくさん出てきてしまうという感じですね。

最初のお話ですが、天譴論でも、神義論でもなくというのは、そうだろうなと思ひながら、これはどう考えたらいいのかと思ひたことがあります。というのは、田中正造もそうですが、これは原発問題の方に触発されている面が大きいですね。

つまり足尾銅山や水俣病と、今回の福島原発はつながるところが多くて、要するに、棄民というか、国が地域の住民を見放すというような事態が起こっていることが大きな問題になっています。世直しということを考えたときに、これはちょっと忘れられないことではないだろうか。

全日本仏教会は12月1日に、原発によらない生き方を求めるという宣言文を出しています。この中には、天譴論でも、神義論でもないけれども、今回の震災の中で、原発は人災の面が大きくて、従って、どこかでわれわれは、物質的な欲望の下に何か犠牲を強いてきたということを見直さなければいけない。犠牲を前提とした生活をしてきたということの証明に原発というものがあるというのが全日仏、仏教会の指導層、ある種の方たちの中には分け持たれていると思ひます。

私自身も実は、岩手、宮城、福島を、震災の支援ということで共に歩むということに参加したいという気持ち、そして活動しております一方、これは科学者集団の一員としてということになりますが、学問が国家、産業界の側に付いて、人々に犠牲を、見殺しにするとおひますか、そういう立場を取ってきたことに対する活動とおひますか、科学に何か大きな間違いがあったということの問い直しと二本柱でやっているとおひますか、その間で、やや股裂きになりながらやっているところもあります。

そのかたちで言うと、金子さんは、もしかして阪神淡路大震災と東日本の連続性で受け止めていらっしゃる。やはり今回は福島の人苦しみ続けていることが私の場合、重いです。東京でもホットスポットの地域の人すぐ近くにいる。東大の場合、柏キャンパスというのがありまして、その近くの住民は、とどまるべきか去るべきかということで非常に苦しんでいるとおひます。

そういうところで活動していますので、世直しの問題というのは、どこか自然災害の中

から立ち直っていくというところに世直しを見るという、金子さんのお話の基調はそうだったし、私もそういうことを基調にして震災支援の活動をしているのですが、しかし、社会の仕組みの中に何か間違ったことがあって、それに対して何かしなくてはならないという側面も、やはり今回はあるなど考えています。

ただ、宗教との関わりで活動する場合、そういう問題を表に出すと決してうまくいかないだろうというふうに思っていることはあります。

私の人生の歩みから言うと、ベトナム戦争や学園紛争のころに、理系から文系に移って、思想、宗教の方へ移ったということで、いわば若いときに、ちょっと世直しの方へ行きまして、跳ね上がったたり、浮き上がったたりして、自分は中身は何もないのに、そんなに跳ね上がっていたということを痛切に感じて、やはりここは宗教みたいなことから考え直さなければ駄目だという経験をしました。ですので、世直し派から心直し派へ変わったのです。

しかし、世直しのものは、ずっと、うつぼつとして自分の中にあるわけです。今回はちょっと目覚めてしまって、また跳ね上がっている気配があるので、皆さん、ぜひ抑えてください。ツイッターなどでは跳ね上がりをしているのですけれども。

やはりいま日本は大きく問われていて、原発問題というのは、何か世界の、いまの全体の構造の問題を問い掛けている。それに多くの人が巻き込まれている。そして福島の人たちは、その中で本当にうめいているというか、そういうことが、どこか阪神大震災とは非常に違う何かだということも思っています。

田中正造的な動きは、私どもの大学に児玉龍彦先生という方がいて、あの方は、もしかしたら現代の田中正造かもしれないようなことをしています。彼は盛んに「お母さん革命」ということを言っています。つまり、大きな組織の人は全然立ち上がらないけれども、地域住民の方が、いろいろな横の連携をつくって、一番必要なことのために行動を取る。それがじわじわと力になってくる。市町村の方が県よりいいし、県の方が国よりいいと。

新聞で言うと、中央の新聞より地方の新聞の方が真実を伝える可能性がある。そういうふうなこと。それもまたソーシャルメディアですか、そういうものの方に真実を求める人が多いということが起こっています。これはエジプト革命とかと通じるところがある。

何かこう、近代社会、特に国連の安全保障理事国などがつくってきた、現代社会が持っている虚妄というものが暴かれている、そういう面があるのですね。つまり放射能の被害について、うそで塗り固めているわけですね。それはアメリカやイギリスやフランスがつくってきたもので、そういうことは、いまお母さんたちの方がよく知っているというようなことが起こっています。

盛り上がり過ぎですね。ちょっと跳ね上がり過ぎだか、盛り上がり過ぎだか、浮き上がり過ぎだかがあります。

私は、仏教界のそういう声明には、割と共鳴しています。多くの檀家さんの中には、原発が大事だという人もいます。そういう中で、しかし、浮き上がらずに、脱原発とも、反原発とも言わないで、原発によらない生活の方へ行きましよう。その基本は、人の犠牲に

成り立っているような生き方を改めていきたいと思いますということですね。

それは、何か大事なことを言っているなという気がしています。金子さんの言っていることと、ちょっとずれていると思いますが、何か反応していただけるといいかなという気がしています。

もう一つ、伝統宗教と新宗教は、最後の金子さんのお話から言うと、新宗教は結束型ですね。伝統宗教は橋渡し型ですね。岩手、宮城など、私は東京にいて、支援活動をしている方のお話を伺っているだけなので、どこまで当たっているか、皆さん、ご存じだったら教えていただきたいのですが、新宗教、例えば立正佼成会とか、創価学会とかの方は、やはりまずはメンバーの救済ですね。メンバーといっても、縁の薄いメンバーがたくさんいますので。そういう人たちを助けるということを中心にやっています。

余力があったら外へということもあるのですが、あまりそちらの方へは手が伸びていないですね。ですから、やはり仲間の救済をしてきた団体は、~~やはり~~いまも仲間中心の救済活動になりがちです。

伝統仏教会は、広い連帯を求めている。臨床心理士とか、医師等の協力も求めるし、まさに鈴木岩弓さんのお話とつながりますが、いろいろな新しい可能性を、求めていますね。

高野山足湯隊というのがありますし、曹洞宗の青年会の活動があつて、結局宗教色はいったん横に置いておいて、とにかく被災者の目線で、いろいろなものを教えてもらったり、元気付けたりしてもらいながら、こちらから出せるものを何か提供しようというボランティア精神というのを発揮しているわけです。

しかし、これはどちらかというと、少数の、副住職の運動みたいなのところもあるわけです。檀家さんが一緒に動いているかということ、そういうわけではない。そういう人たちもいます。

あるいは、福島県で子どもたちの支援活動をしているお坊さんもいるのですけれども、どちらかというと、少数の有志が活動をしている。ですから、この伝統宗教と新宗教のギャップみたいなものがある。

そこへ行くと、もしかすると、教派神道はその間になるのではないだろうかという気もしているんですね。ここにはいらっしやらないですが、東北には、松緑神道大和山とか、大和教団というような神道系で大変な被災をした団体があります。そういう方たちは地域の住民とも近いので、少し違うのかなと想像しています。創価学会とか、立正佼成会と比べると、結束型よりは橋渡し型になるような性格を持っているのかもしれないと思います。

話がいろいろ分裂しておりますが、以上が二つ目のことですね。

もう一つは、最初の話と、またつながってくるのですが、世直しと言うときに、やはり希望を見て復興というのは、阪神大震災ではそうだったと思うんですけれども、まさに福島の人たちは、要するに分裂とか、亀裂というのがある。

放射能の影響をどのくらい評価するかで、常に争いが起こっているわけです。家族の中で争いが起こり、近所の方と争いが起こり、話し始めたら、相手がどういう見解を持って

いるかを探りながら、話し方を変えなければいけないというふうなことが起こっています。そういうことが、今後ずっと続くと思われるのです。そういう中でどういう支援が行われるのか。

そういうときに、希望の話では少し足りないかと言いますか。原発も、ある時期は希望だったのですね。希望の方へ、希望の方へと、科学者は、あるいは産業界も政治家もそちらの話をして、リスクの方を軽んじてきたということがあります。

この辺も、超越体験と宗教体験の区別の方も、宗教体験の方に希望のことを言われたと思います。私の理解では、むしろ最初に答えがない、津波の中に感じたものは何か。そのことの中にとどまるともおっしゃいましたね。そちらの方から出てくるようなもの。

金子さんのお話の中には、宗教者という面と、誰でもがという面と、両方おっしゃいましたね。内面性豊かなというのは、最後にそういう救いを信じるというものを持っているということと必ずしも一致しないかもしれないということも私の中にはあります。

私のことを、「縁なき衆生」と言う方はたくさんいらっしゃるのですが、本当にそう思っておりますので、やや言いにくいことを言っております。

いままで私は、原発問題と震災問題を別に、要するに使い分けて、自分の中でバランスを取っていたのですが、今日の金子さんのお話は、私をその真ん中へ放り投げた、そういう内容でしたので、やや混乱しながら矛盾したことを申し上げていると思いますが、以上で終わりに致します。

質疑応答・討議

○鎌田 ありがとうございます。とてもいいコメントをしていただいたと思います。それでは、金子さんの方に、その島菌さんのコメントに答えていただいて、それから質疑応答や、意見交換をしていきたいと思います。

○金子 島菌先生、どうもありがとうございました。コメントしていただいた内容は、3点ほどあったかと思います。

一つは、原発の問題。二つ目は、伝統宗教と新宗教のソーシャルキャピタルとしての違い。三つ目は、希望という言葉では片付けられないものがあるのではないかというご指摘。この3点に、うまく答えられるかどうか分かりませんが、私はこういうふうに考えております。

一つ目の問題ですけれども、たしかに今回の大震災において、もし原発の問題が発生しなかったとすれば、つまり、もし福島第1原発が無傷のまま残り、ただ大津波の被害だけで終わっていたとしたら、東日本大震災の救援とか、社会のその後の動きというのは明らかに別な展開になっていただろうと思われま。

原発というのは、明らかに人災です。だからこそ、そこに世直しの問題提起が強く出て

きたと思うのです。今年で17年目ですけれども、阪神大震災の場合は、17年たったときに、被災者の方のまだ残る心の傷への癒やしや、亡くなった方への追悼というふうに、内面の問題にますますシフトしていつている。宗教的ケアも、そういった内面的ケアの方に移るだろうと思われるのです。

しかし、人災、つまり人間が起こした災害ということに対して、それはいったい誰がどういうかたちで起こしたのか、また、われわれ一般市民もどこかで関わっているはずではないかということで、社会の仕組み、あるいは文明の在り方に対して、大きな意味でそれを変える運動が、これからいつそう起こってくるだろうと予想されるのです。そしてそうした運動は実際に起こって、ますます広がりを見せています。

そういうときに、世直しという問題提起がどのように関わってくるか。こういう問題提起も含めて、私は考えて発表をいたしました。

二つ目の伝統宗教と新宗教のソーシャルキャピタルとしての性格付けですけれども、たしかに傾向性としては、島菌先生がおっしゃった通りだと思います。ただ、天理教の場合で言ってみますと、実は二本立てで考えていたのです。

義援金に関してもそうでした。天理教本部としては、各自治体にそれぞれ渡した義援金というものと、もう一つは、自分たちの教会の復興、あるいは自分たちの「災害救援ひのきしん隊」が出動するための支援金と、この二本立てでやりました。義援金と支援金という言い方をしておりましたけれども、これを並行して集めて、たしか両方ともほぼ同じ3億円近く集まりました。

ですから、「橋渡し型」と「結束型」というのは、二者択一のものではなくて、当然総合されてしかるべきものであって、伝統仏教であっても、お寺が破壊された、また檀家さんが苦しんでいる。そういう内側の者に対して、やはり同じ仏教教団からの手厚いケアも、一般の人たちへの支援とは別に要求されるでしょうし、そういう意味で「結束型」の要素があると思うのです。

新宗教の場合も「橋渡し型」があります。外に向かって活動するという側面です。天理教の場合、災害救援ひのきしん隊が大規模に出動しましたけれども、それはまったく教内中心ではなく、外向きの活動に終始していました。

三つ目の、希望ということですが、たしかに原発は、われわれ日本人の戦後の一つの希望であったかもしれませんが、しかし、それは、われわれが豊かな生活をするために、前のめりになって押し進めてきた希望であって、むしろそれは実は受け身の期待という言葉のほうがいいかもしれません。これをすることによって、何かいいことがあるのではないかと、思う。原発によって豊かな暮らしができるのではないかと、思う。これは能動的な希望ではなくて、受動的な期待だと思うのです。

しかし、どん底に落ちたところで、なおかつ、まだ自分という人間が曲がりなりにも生きていくところから、つまり身一つになっても、外側のものが全部剥ぎ取られてホームレス状態になったとしても、やはりそこから生まれてくるものに、よりどころを持つ

て、主体的に生きていくことができる。そういう生き方を考えた場合、希望という言葉自体は、もっとこれから深めていくと概念としても非常に力強いものを発揮できると思っております。以上であります。

○鎌田 ありがとうございます。7月20日のときは、時間も不足して、議論するような状況ではありませんでしたので、そのときに、金光教の渡辺さんと大本の出口さんのお二人に、こちらの方から指名して、今回のシンポジウムについて思っていることをお話しただけでないかということで締めくくりました。

その渡辺順一さんと出口孝樹さんが、前回に引き続いて第二回目の今日も来てくれます。天理教・金光教・大本教は「世直し」三大宗教だと思いますが、金光教や大本から「世直し」について、自分たちのスタンスや感覚、あるいは立ち現れてくるジレンマや問題点などを含めて率直に語っていただければと思います。渡辺さん、お願いします。

○渡辺順一（金光教） まずは金子先生、ありがとうございます。特に世直しということについて、ここ何年間か、金子さんが語っておられたことを知っておりまして、きちんと考えていかないといけないということを、私も思い直しております。

というのは、資本のグローバリズムが、国とかを越えて資本主義が暴走するような無政府状態が世界中にまん延していて、その中で、一人一人が非常に孤立化されていく。自己責任論で、つぶされていく人間はそのまま放置されていく。そういう状況が来ております。

政治も信用できない、国も信用できない、会社も企業も信用できないという中で、では、宗教とは何なのと言うときに、心の救いだとか、一人一人の慰めだとか、寄り添いだとかだけで話して済ませていいのだろうか、ということは思います。

資本のグローバリズムに代わるような大きな物語、人が生き得るような物語、未来を構想できるような物語を、時代社会に対して提示できないとすると、それは宗教としての値打ちが、やはりどこか足りないということではないか、と思われました。

ということなのですが、しかし別の面で考えると、例えば金光教祖は、自分が生き神であることを最晩年に否定するのです。俺はただの土を掘る百姓だ。むしろあなた方が生き神ではないか。つまり、この言葉で言うと、あなた方が菩薩ではないか、ということをおっしゃるのです。

金光教祖は、「人代（にんよ）」である今の世を「神代」に戻していくのだ、という「世直し」的なイメージも語っているのですけれども、その神代というのは、具体的な社会体制ではなくて、神々と大自然と人々との関わり合いの状態を表すような、現れ出る一つの「状況」を表すような言葉として、提示していたのではないかと思っております。

それが一つの社会体制になってくると、二元対立になってきて、現実の政治体制との関係の論理が働いてくるので、宗教的な世界イメージとは違った、非常にやっかいなことが起きてくるのではないかと。

金子先生が言われた、善の循環とか、慈濟会の例は非常に分かりやすく、面白い事例だと思うんですね。先住民族に対して善の行為を行うけれども、彼らにとって、それが善かどうかというのは検証されていかない。善は一つではなくて、無数にあって、ある者からすると悪でしかないというようなことですね。それが、現代のいま、慈濟会によって実験されているというように見た方がいいのではないかと思います。

そういうことも含めて、では、善とは何なのか。人が助かるとは何なのか。理想の世の中とは何なのか、という問いを問い続けてきた。それが民衆宗教と言われる教祖たちの言葉だったのではないかと考えております。

鎌倉時代の新仏教運動も、おそらくそうだったと思います。鈴木大拙が、日本的靈性と言うのだけれども、その内容は民衆的靈性との出会いということだと思います。開祖たちは、京都から流刑地である関東に移らされて、そこで獵師や漁師など民衆が持っている靈性、光と出合って、それまで抱いていた自分の宗教的な、教義的な体系をもう一度再構築させられている。

善なる教義を、関東の地に持っていったのではなくて、持っていた体系自体が、何が善で何が悪かという観念自体が、祈る言葉も知らない、教義も知らない、そういう民衆が持っているその靈性によって再検討させられて、再構成させられた。そういう経験が鎌倉新仏教であった。

幕末維新期の新宗教運動も、そういう経験を教祖たちがしたのだと思うんですね。そういうトータルな動きの中で、もう一度、ではどのような世の中構想ができるのかということ議論していかないと難しいのではないかと思います。以上です。

○鎌田 ありがとうございます。次に、大本の出口さん、お願いします。

○出口孝樹（大本） 綾部から参りました出口と申します。大本信徒連合会に所属しております。私は、不勉強ですので、信仰的な立場からしかお話しすることができないのですが。

大本も、世直しという言葉で語られることが多い宗教です。戦前、二度も弾圧を受けたのも、そのあたりが一つの原因になっていると思います。

私は、宗教者、信仰者にとっての世直しというのは、各宗派、宗教の教えを实践する、教えをお伝えしていくということ、深めていくことそのものであると思っています。

先ほど鈴木先生は臨床宗教師という試みについてお話してくださいました。非常に興味深いテーマだと思っています。ただ、どこまで踏み込めるのかという思いもあります。

臨床宗教師として、基準を設けて活動を行っていくときに、ここまでは共通化できると線引きをして活動することが出来たとしても、その先に、それぞれの宗教の個性があって、言ってみれば、その宗教の一番肝心なところ、救いの言葉であったり、大切なものがあるような気が致します。そういったところで、宗教が宗教として求められている役割を果た

すことが出来るのかと考えておりました。

私は、宗教的世直しというのは、組織としての目に見える活動もちろんありますが、それぞれの宗教の、宗教であればこそ発せられる救いの言葉、仏の言葉、キリストの言葉などであって、そういったものを、もっとこの時代に、しっかり力強く発信していくことが、求められているのではないかと思っております。

大本では、世直しという言葉よりもよく言われるのが、「立て替え、立て直し」という言葉です。これは、震災と合わせて考えるとき、非常に注意を要する言葉だとも思っております。

立て替えというのは、一つは破壊を意味します。例えば、大三災や小三災もそうでしょう。大本が受けた宗教弾圧もそうでしょう。また、個人の心や感覚にも当てはめられるものでもあります。

その後、立て直しによってそれ以前よりもさらに素晴らしい世界が構築されていく。

つまりどういうことかと申しますと、立て替え立て直しや世直しというのは、平和で穏やかな時代には求められないことですね。やはり時代が非常に困難な局面を迎えている、例えば戦争中であつたり、今回の大災害などで、困難な時代に求められることが多いのだと思います。

出口王仁三郎は、立て替え、破壊という非常に悲しいこと、これは悪魔が行う。立て直し、再生は神が行うと言っていますけれども。それは別々に行われるのではないと。一体で起こってくるものだと。つまり、立て替えという困難なことがあって、それを乗り越えていこうとする、また、その悲しみの中から、新しいものや喜びを生み出していこうとする力があるのだと。

つまり、立て替え、立て直しというのはセットだと。世直しも、やはりそういう困難な時代にこそ、生まれてくる思想や願いであるのだらうと思っております。ですから、宗教的な世直しの思想が、この震災という困難を乗り越えて、素晴らしい未来へと立て直していく力になることを願っています。

すみません。纏まらない話になってしまいました。

○鎌田 ありがとうございます。それぞれ、金光教の活動をし、大本の活動をしているお二人から話を聞いて、7月のシンポジウムとのつながりの中で問い掛けてくれましたので、金子さん、島菌さんに、いまのお二人を含めて、コメントしていただいて、それから、また自由に議論していきたいと思っております。

○金子 渡辺先生、出口先生、どうもありがとうございます。お二方の話を聞かせていただいて、別々に答えるというよりも、まとめて私の思うところを申し上げたいと思っております。

世直しという言葉は、大本の言葉では、立て替え、立て直しとセットになって使われる。しかもそれは平和の時代に出てくる言葉ではなくて、困難な時代だからこそ出てくる言葉

である。私もその通りだと思います。いまの時代はまさに困難な時代であるという認識、この共通認識に立って、われわれは考えるし、行動していかなければならないと思うのです。

ただ、世直しを進める場合にも、それぞれの宗教の教えというものがあって、その教えの持つビジョンとか物語が、そのままのかたちで使えるかどうか。これはいまの非常に多元化した社会の中では難しいだろうと思います。それを無理にやろうとすると、たとえ援助者の側に熱い思いがあっても、援助を受ける人たちの気持ちよりも、自分たちの善を押し付けてしまうということになりかねない。それは渡辺先生のご指摘の通りだと思います。

鈴木先生のご発表の中でも聞かせてもらいましたが、自分はこの宗派の僧侶として行ったけれども、相手は民俗的な土着のやり方でやってほしいと言ったので、このやり方でやるとかといったように、自分の宗教がということではなくて、宗教を越えたところで、現場の被災者の方にとって必要なこと、あるいは現場の被災者の方によって求められていることをやっていく。それを進めていくことが被災地にとっての善ではないかと思うわけです。

その意味で、こちらが持ち込んだ善も、もちろんあるでしょうけども、それを被災地にとっての善というものと付き合わせながら進めていく。このやり方しかないと思います。

宗教の言葉が力を持つときというのが仮にあるとしても、当然、PTSDで混乱しているときに、そんなことを言っても無理ですし、あるいはグリーフケアの段階に至ったとしても、直接それを語って納得してもらえるかということ、これもまた別です。同じ宗教者でも、あなたならいいけれども、この人は困るとか、やはりそういうことも出てくるので。

言葉とか、物語とか、もちろん教えの中身も大切ですが、何よりも問われてくるのが、宗教者という生身の人間の姿ですから、これも以前に稲場先生がおっしゃっていたのですけれども、宗教者の人間力というのが問われてくることではないかと思っています。

○鎌田 では、島菌さん、お願いします。

○島菌 私は、本当に心強い、仙台の「心の相談室」と、「支援のまちネットワーク」があるので、東京での宗教者災害支援連絡会もできているという気がします。それぞれに特徴があって、その話も、今日、いろいろ伺えたと思うんですね。

支援のまちネットワークは、先ほど渡辺さんがおっしゃったように、無縁社会化、人々が世界中で孤立していつている。それを何とかしたいという大きな世直しのビジョンがやはりあると思います。これは非常に貴重なものだと思います。

原発もそうだし、津波でも、これからますます孤立して、仮設でいつの間にか亡くなっているという可能性が非常にあって、無縁社会的な問題と、震災の問題はつながってくる。福島などは人口も減ってきてしまうということで、本当にこれは重要な問題意識です。

先ほど、一種政治的な方から世直しを考えるのと、日々の生活の中から世直しを考える

ということを分けたつもりです。どちらかという、学問をしたり、~~そういう~~本をよく読んだりする人は、政治的な方からそういう問題を見るし、生活の中で宗教を大事にしている人は、そちらの方から入っていく。その両方を、私は共に大事にしたいと。

いま起こっていることは、政治が好きな、あるいはそういう思想とか、書物が好きな人が、やはりどこか心の問題をやらなければ、この問題は解決しないよという方向へ向かってきているのではないか。だから、何とか、両方の方向をつなげることができないか。でするので、仏教界の知的なリーダーの方たちが原発について、声明を、リーダーシップを発揮して、いい発言をしていると私は思うんですが。

立正佼成会や天理教にも、そういう発言をしてほしいなという気持ちはあるんですけども、しなくてもいいやというか、しない方が本来だと。つまり、そういう問題に、すぐに関心がいけない人の方が、むしろ多いわけなので、そういう人のところから、場所から考えるという感覚です。これがすごく大事だと思います。

○鎌田 ありがとうございます。ここでちょっと視点を変えて、次に、二つのアプローチを取り上げてみます。

今、宗教的世直し思想、宗教中心に議論をしてきました。ここに、造形美術家の近藤高弘さんが来てくれています。近藤さんは、こころの未来研究センターで、モノ学やワザ学の連携研究員として共同研究をしてくれていますが、昨年夏に、福島県と宮城県の県境の七ヶ宿で「命のウツワ」という陶器をつくって、それを被災地に届けるという支援活動をしてきました。つまり、アートやものづくりとかといったことから「世直し」という問題にどういうアプローチがありうるかを聞いてみたいと思います。

それから、その隣に座っておられる関西大学の串崎先生は、臨床心理士で、臨床心理学を専攻されています。今日の話は宗教学者が中心になっていますけれども、心理学の立場から、今起こっている震災後の心のケアとか、今まで言われてきた中での問題点などを串崎さんの立場から問題点を指摘していただけたらと思います。では、まず近藤さん、その後、串崎さんにマイクを回したいと思います。

○近藤高弘（陶芸・美術家） 近藤高弘と申します。いま鎌田先生に言っていただきましたように、家内が仙台出身だということもありまして、たまたま、昨年で13年間、東北の山の中の七ヶ宿というところですけれども、毎年夏にワークショップをしてきました。

地元の山から土を採って、東北の山の中ですから、非常にアカマツが豊富にあって、その間伐材を利用して、登り窯で焼き物をつくるというワークショップに13年間かかった延長線上に、今回、このような災害がありました。

自分に何ができるのかということで、ワークショップに参加していただいた方とか、あるいは同じものづくりの人たち、いろいろな方と協力して、7月、8月、そして10月、作品を2千点ぐらいをつくり、また10月10日に、これも鎌田先生、鈴木先生に来ていただ

いて、シンポジウムを七ヶ宿で行い、それ以後、各被災地、宮城県を中心に、岩手、福島に器を届けるということをしてきました。

器をどういうふうに届けるのかというのが、すごく大きな問題で、結果は、人のネットワークで配るしかないというので、鎌田先生や鈴木先生、あるいはお寺の関係のご住職、あるいはNPOで活動されている方々にお渡しして、本当に喜んでもらえる、あるいは困っておられる方に配るしかない。

つくったといっても、たかだか2千点しかないわけです。だからそれをどういうふうに配るかということは、本当に分からなかったのですけれども、この活動は、今年も、あるいは来年も継続できれば、いろいろな方々のご協力の下、継続していきたいと思っています。

もう一つ、実は、私も昨年、石巻の仮設住宅に器を配布に行きました。僕が感じたのは、皆さん、確かに器を差し上げて喜んでくださる。いまの本当に仮設住宅の殺伐としたところでは、手作りの器を喜んでもらえるのだらうと思っていますけど、それだけではなくて、特に仮設住宅での、仕事もない、目的もないという状態の中で、何かもうちょっと、その器を生かしていけないかということを考えています。

実現するかどうか分からないのですけれども、いま、たまたまフランス人の建築家の方と、屋台プロジェクトというのを考えています。つまり、屋台をつかって、フランス人のシェフに来てもらって、地元のおばさんやおばあちゃんと一緒にコラボレーションをして、ビストロなり、フランスの料理をつくると。その料理を、またわれわれがつくっている器で食べてもらうというような、本当に小さなことですが、そういうプロジェクトができないかと。

単に配るだけではなくて、器やそういうものの中で、まだ実現できるかは分かりませんが、次の段階へ何かきっかけになっていかなのかなということも考えながら、今年もこのプロジェクトを続けたいと思っています。以上です。

○鎌田 ありがとうございます。では、続けて串崎さんから。

○串崎真志（関西大学・臨床心理学） 失礼致します。関西大学文学部の串崎と申します。私の専門は臨床心理学で、昔は臨床心理士をしていましたけれども、いまはやめております。心のケアについては関心があって、いろいろと考えてきました。今日は、先生方の大変貴重なお話を聞いて、さらに考える機会になりました。ありがとうございます。

臨床心理学や心理学の立場では、対象が個人であるということが、おそらく大きな特徴です。皆さんもご承知のように、個人の心をターゲットにしている。それは下手をすると、個人のいわゆる癒しのようなもので終わってしまう。そこに、やはり大きな限界があると私は思います。

それは心理学の側から言えば、何とかして越えていかなければならない限界です。つま

り個人の癒しではなくて、つながりと言いますか、稲場先生の言葉でいう利他主義が見えてこないといけない。けれども、どうしてもうまくいかないところがある。もちろん個人の心を突き詰めていけば、つながりが見えてくるという考え方もあるとは思いますが。けれども、それはなかなか難しい。心理学あるいは臨床心理学の一つの限界だと思います。

それを踏まえると、今日のお話で、宗教の持っている力をさまざまに拝聴しまして、一つは、皆さんが、やはり地域の自然なつながりの中で活動している。このことが、宗教の大変大きな力になっていると感じました。

もう一つは、生と死を踏まえて話す。超越と言っていいかもしれませんが、あるいは、生きることと死ぬこととのつながりを考えることが、宗教の大きな力になっているような気がしました。この二つは、心理学や臨床心理学も考えてきたところですし、いろいろと工夫しようとしているところもあるのですが、やはりなかなか力が及ばない。

その点において、鈴木先生のお話、臨床宗教師という新しい活動、つまり宗教が宗派あるいは教派を越えて活動する領域をつくり上げていくというお話などは、私も大変応援したいという気持ちで聞かせていただきました。どうもありがとうございます。

総合討論

○鎌田 近藤高弘さんはものからアプローチをして心の問題、心のケア、悲しみとか、苦しきとか、グリーフケアのところへどのようにしてタッチしていくことができるのかという課題に取り組んでいます。

そこにおいて、「もの」だけじゃなくて、もう一つ、料理であるとかの「こと」を起こさないと、ただ「もの」だけだったらそこから先へは入っていけない。それをどういうふうにして「こと化」していくのか。そのときに、料理であるとか、いろいろなつながりをもう1回新たにイベント的に生み出さなければいけない。そのイベントも通り一遍のものではなくて心のひだに触り、身体に染み通ってくるものやこと必要です。

同時に、個の心に集中的に関わってきた臨床心理学も、限界というのか、これまでの方法論では、特に今回のような大きな出来事が複雑骨折しているような三重苦のような状況の中ではこれまでの方法論では太刀打ちできない。宗教の今までの方法も太刀打ちできない。臨床心理学の方法も太刀打ちできない。今までのものづくりとか産業も対応しきれない。

いろいろな意味で、構造欠陥みたいな状況の中にあるのが現状だと思うんですね。だから、そこをどうやって突破しなければいけないのかが大きな課題になってきます。

その突破口となるワザはこれから編み出していかなければいけないので、実験的にいろいろなことをやらなければいけないと思っています。さて、もう二人、聞いておきたい人がいます。

一人は黒崎浩行さんです。黒崎さんは今回からわれわれのプロジェクトの連携研究員に

加わってくれました。黒崎さんは國學院大學にいますので、先ほど鈴木さんが神社、神道の対応が遅いという、この問題は、英霊のような、群れの神道からするとどういえるのか、お考えを自由に述べてほしいと思います。

○鈴木 あまり大声で言わないでください。

○鎌田 いやいや、いいですよ。大声で言いましょう。私も鈴木さんの立場だったら大声で言う。言わなければいけないんです。確かにそうだと思うから。臨床心理学は個に立ち向かい、仏教は個とコミュニティと両方に立ち向かいました。

しかし、神道はこれまでコミュニティの絆となる祭りはやってきたけれども、個の心のひだにはなかなか関わることができなかつた。けれども、先ほども鈴木さんの話に出てきたように、神楽や芸能などの地域文化を通してもう1回つながりの世界へ入っていく。この辺の問題について、黒崎さんからコメントがほしいです。

それから、黒崎さんの前に座っている宮本要太郎さんは、筑波大学と一緒に宗教学者の荒木美智雄先生のところへ博士論文を提出した仲間ですが、荒木先生がやろうとしてきた宗教の創造力という問題をどう考えるかを語ってほしいと思います。

金子さんの話の中にも、宗教の創造力の問題が宗教的世直し思想の問題として出てきました。宮本さんはその問題を物語る力とも関連づけて考えておられるので、そのあたりのこともコメントしてほしいと思います。ではまず、黒崎さんから。

○黒崎浩行（國學院大學） 黒崎と申します。よろしく申し上げます。先ほど、渡辺先生がおっしゃったことと、ちょっと関係があるかなという気がしております。

私は、7月の21日に、いわき市へ行ってまいりまして、そこで福島県浪江町の請戸地区というところで行われていた田植踊りというものを再現しましょうということで、その保存会の人たちや子どもたちが集まって、アクアマリンふくしまという小名浜にある水族館、ここも実は津波でやられたんですけれども、そちらの方で再現をするイベントというのを、いわき市のある神職の方が音頭を取って、いろいろ奔走されて、人を集められて行われたのを見てきました。

浪江町の請戸地区というのは、津波と地震と、そして原発事故で避難しなければいけないという三重苦を負っているような状況の中で、特に二本松市に避難された方が多かったので、その方たちとか、東京にも避難されている方たちもいたのですが、その田植踊りというのが披露されたのです。

この田植踊りというものの起源と言いますか、江戸時代にかたちづくられたらしいのですが、やはり東北地方はどこでもそういう状況はあると思いますが、風害、水害、そしていわゆる干ばつですね。農業をやっていくのに非常に厳しい状況というのは、ずっと、何年かに1回は起こってくる。飢饉とかですね。

そのたびごとに、神社でさまざまなお祭りをして、再興を祈ることを繰り返してきた。それが一つのかたちとして田植踊りへ。田植えの踊りですから、豊作の祈願でもあり、請戸地区の場合は豊漁祈願というものも実はそれに伴っていたということで、そういった踊りがいまに伝承されてきた。

しかし、震災と原発事故によって、それが崩れ去ると言いますか、崩壊させられるという状況にあった。それを何とかして、福島県に踏みとどまって継承していこうという動きをいわき市の神職の方がされているのを目にしました。

これは報道されていますけれども、飯舘村で、いまでもまだ避難されない、特にご高齢の方を対象にして、奉仕をされている神職の方がいらっしゃるとか、そういう状況があるということを知っています。

金子先生から、足尾の田中正造の例が挙げられましたけれども、いま私の大学の院生で足尾の神社というのを調べている学生がいて、足尾銅山は閉山されていますから、だんだん過疎化が進んでいっているんですけども、ちょっと神社がうち捨てられているような状態になっているという状況があるそうです。

神社が、こういった近代化や開発に、ある種順応していくかたちや、人々がそこに暮らしていくために、さまざまな苦難を経験するんですけども、それを何とか結束して乗り越えていこうというときに、お祭りをやったりする。

そういう場として営まれてきたというのがあると思うんですけども、それが、こういった原発事故とか、足尾の場合は開発で鉱毒事件というものを起こすわけですけども、その開発が終わって廃れていくというところで、どうやって踏みとどまっていけるのか。現地の人たちと共に踏みとどまっていけるのかというところが試されているというか、そういう状況にあるという気がしています。

これは、世直しというベクトルとは、またちょっと違うところで宗教者の役割というのが現場であって、それに対応している動きというのがあるのではなかろうか。その辺のところを、何かバランスよくきちんと見ていかないといけないのではないかと、ちょっと私はいま感じております。

○鎌田 ありがとうございます。では、宮本さん。

○宮本要太郎（関西大学） いま、ご紹介いただきました関西大学文学部の宮本です。串崎さんとは同僚です。

特に金子先生の、民衆の世直し力に対する「希望」を伺いながら、あらためて民衆宗教について考え直しておりました。と言いますのも、先ほど鎌田先生が名前をお出しになった荒木美智雄先生の下で私が宗教学の研究を始めたときに、やはり民衆宗教の創造力ということが一番の問題だったからです。

金子さんのお話を聞きながら、思い出したことが一つあります。実は、荒木先生が生前、

一つの宿題を出してくださって、まだ答えが出ていないんですけれども、それは民衆宗教と民俗宗教の関わりをどう考えるかという問いでした。

そういうことを思い出したのは、最初の鈴木先生のお話の中に、民俗ということへの問いが出てきました。ついで、金子さんの話で、民衆宗教ということが出てきました。私の中では、その両者の関係が、特に未曾有の災害を経て、宗教者に何ができるかが問われているまさにこのときに、この民俗宗教と民衆宗教がいったいどういうふうに関わって、まさに世直しに携わっていけるのかということはずっと考えておりました。

鈴木先生のレジュメの中で、宗教の民俗化と、民俗の宗教化と、二つのベクトルがございますね。それでいきますと、民俗というのは経験的信仰で、民衆宗教というのは經典的信仰というか、教義がそこに付け加わっていったというような捉え方ができると思います。

一方、金子さんのおっしゃっている民衆宗教、民衆力ということにかかわって言いますと、幕末以降に誕生してきた、本来民衆宗教であったものも、こんにち民衆宗教であることが難しくなっている時代、非常に厳しい時代であろうかと思えます。

なぜそうなのかというと、先ほど渡辺さんがグローバリズムの話をしたのですけれども、宗教が組織として、教団として活動をしていこうとすると、こんにち非常に強い磁力がグローバリズムの方に働くわけです。

そういうわけで、私も多くの宗教者を知っていますが、特に良心的な人であればあるほど、こういうグローバルな磁力と、実際に現場で、まさに聖（ひじり）的に生きていくことの間で揺れ動いている人たちはたくさんいらっしゃると思います。

つまり、聖として生きていこう、民衆宗教の担い手として生きていこうとしている人はたくさんいるのですけれども、その人たちが組織の一員となったときには、それを許さないというか、強く阻害するような状況が現代社会に非常に強く働いているということを危惧しております。

そういう意味では、金子さんがおっしゃるように、いわゆる民衆の中に分け入って活動する聖のような存在、こういう人たちを、もっともっと育てていかなければならないのではないかと。

そういう意味で、私は、聖というのは、むしろ民衆を生み出すと言いますか、あるいは、人々に民衆として生きることの大切さを自覚させて、民衆として生きることを促すような、そういう存在であると思えます。

ここで言う民衆というのは、自分の抱えている難儀も、この社会が抱えているさまざまな難問も、自ら能動的に、主体的に変えていこうとする。そのように、神仏の力を借りながらも、能動的に、主体的に世界を変えていこうと積極的に世直しに関わろうとする人々と捉えますと、そういう民衆を生み出す、そういう意味での民間宗教者、聖というものが、現代であるからこそ、まさに強く求められると思えます。

その際に、やはり、これまでの伝統的な民俗の知、民俗知と言ってもいいのでしょうか。そういったものをいかに再生するかということが、特に東北では課題になっています。そ

のことに関連して言いますと、いま、黒崎さんから一つの例が紹介されましたけれども、伝統的な民俗知を再生していくときに、そう簡単にはできないと思うんですね。

というのは、担い手である共同体が崩れているわけですから、共同体の再生からやらなければいけない。そうすると、共同体を再生していく中で、さまざまな宗教者たちが、もっと積極的にそこに関わって行って、それぞれの知恵を出し合って、新しい宗教民俗を生み出していく。そのことが新しい縁を生み出し、その縁を支えていくことになるのではないかと。

それがまさに、超宗派的、超宗教的ということにもなるのではないか。その意味では、私は、新しい意味でのニューシンクレティズム (new-syncretism) というか、そういうものを生み出す起源になるのではないか。その辺に、ちょっと期待しております。

○鎌田 残り時間が10分余りになってきました。そこでまず、民俗宗教と民衆宗教との間の問題もありますので、鈴木さん、金子さんに最後の発言をしていただき、グローバリズムの問題などを含め、島菌さんに答えていただいて、最後はカール・ベッカーさんにこちらの未来研究センターの代表として締めのおまとめをしてもらって、6時に終了したいと思います。では、鈴木さんの方から。

○鈴木 ありがとうございます。いま、宮本先生の最後に、ニューシンクレティズムという言葉が出たのですけれども、僕は、まさに活動しながら、ちょっとそんなことを考えているところです。

結局、先ほどから言うように、僕らは人を救えない宗教学者ではあるので、本当に宗教をつくっていく気は全然ないわけです。だから僕らの方としては、そういう環境を見ていくだけですけれども、やはり宗教者の方々が話す場を僕らは設定しますから、そういうところで何か新しいものが出てくれば、そういうものはぜひやっていただいていると思うんですね。

そういう意味では、民俗知をいかに再生するかというのはすごく大事だと思いますし、お祭りというのはすごく大事だと思っています。エミール・デュルケームの言うことに出ることでなくても、本当に社会をまとめ上げるには、そういうお祭りの仕事というのは素晴らしいものがあります。

先ほどお見せしたクリスマスパーティーみたいな、たかだか数時間やったあれですけど、あの準備のためにも、人もみんな集まってきて、いろいろな方が、いろいろな関わりをしていました。

やはりそういうことで地域がまとまっていくということが出てくると思いますので、まさに地域がなくなったところ、確かに先ほどから何度か出てきた、近藤先生にも出てきた石巻などは、仮設住宅が、ざっとつながっていくようなところがあるんですね。そこに新しい共同体がどうできていくのかということを考えると、そういうところがすごく重要かと

思います。

あと、先ほど聖とグローバリズムと言いますか、そちらの教団との問題。これはものすごく感じています。先ほども、どなたかおっしゃった中で、先生でしたか、副住職が動くけれどもと。まさにそうですね。

心の相談室に井上先生もこられましたし、いろいろな方が見えるのですけれども、僕らの周りでも、近隣の方からいろいろな方が来られるのですけれども、多くはご自分の判断で来られているんですね。

教団とは全然くっついていない。教団に言うと、こんなことと。特に、あるところでも、ちょっと具体的にお名前は出しませんが、被災地に入って、思わず海の方へ向かって祈られた仏教者の方がいらっしゃるわけです。

その方は、ある仏教系の大学の先生でして、その話を、ちらっと仏教系の大学へ帰ってきてしたら、先輩の先生から、そんなことをして何になると言って、怒鳴られたという話なんですね。その先生は悔しくて研究室で泣いていましたとおっしゃっていましたけれども。

結局、ある意味では、そういう経典的な方、教義の方に忠実に行けば、そんなことをして何になるという話でしかないんですね。でも、そうせざるを得なかったという人の気持ちを全然分かってもらっていなかったというあたりが、やはりギャップが相当あるなという感じがします。

さらに言えば、話が飛んでしまうかもしれませんが、僕は、あるところで、研究費を獲得するための、研究の企画を審査することをやったんですけれども。やっぱりいま、ものすごく震災で取ろうという人が多いんです。そういう人がプレゼンをやったんです。

僕が聞いていたときに、何て言ったかという、すみません、震災は終わりましたが、まだ原発の方は続いていますねと言いながら、その方は実は震災のことでお金を取って、研究していこうという人だったんですね。僕は、つい腹が立って、言うてはいけなかったかもしれないんですけれども、文句を言いました。

僕は東北大学から来て、まさに被災地にいますと。誰も震災は終わったなんて思いませんよと。震災を終わったと思って調査に入ろうものなら、それはあまりにも被災者をばかにしているのではないですかということで、つい怒ってしまいました。怒るべき場所ではないんですけれども。

ただ、いまはもう、そういうふうには世間は、かなり過去の話として考えている人が多くなってきているわけです。だからそのあたりが、教団の中でも、場合によると、離れていると、そういうことも起こってくるので。

そうではないという部分で、仏教で言えば、本当に、特に副住職クラスの方たちが一生懸命にやっつけらっしゃる、そういうところがあるので、その辺を、本山の方、あるいは教団本部の方からもきちっと見ていただくとありがたいと思います。

そんなことを言う話でしたか。何かちょっと話がずれてしまったかもしれませんが。

○鎌田 ありがとうございます。次に、金子さん。

○金子 宗教者と宗教学者の関わりということで、あらためて気が付かされるのですけれども、例えば、心の相談室は東北大学が中心となって鈴木先生がやっておられる。それから、宗教者災害支援連絡会は、島菌先生が中心となって東京大学でやっておられます。

私も、かたちばかりの事務局長をしているのですけれども、大阪で支援のまちネットというグループに関わっていて、そこは大阪市立大学、関西大学、また私のような天理大学の研究者が関わっているのですね。

宗教学者と宗教者のコラボレーションというものが、これからの支援の新たな展開において、もしかしたら大きな力を発揮していくのではないかと考えております。鈴木先生や島菌先生は優れたコーディネート能力がおありになり、また幅広い見識もお持ちですので、宗教者の側も教えられるところが非常に大きいと感じております。

民衆宗教と民俗宗教についてですが、私は民俗宗教ということはあまり考えたことはなかったのですけれども、民衆宗教について一言申し上げたいと思います。民衆宗教という言葉は確かにありますが、大衆宗教という言葉はないと思うのです。大衆、つまり人間をマス（塊）として捉えるような宗教は、宗教ではないと私は思っております。

なぜなら、一人一人を大切にするとところから民衆宗教の発想が始まっていくわけで、民衆宗教の世直しというのは、一人一人が力を付けていくために、宗教者が力を貸していくことだからです。

宗教者といえども、やはり生活者でもあります。その生活者であるという視点を、いわゆる伝統宗教の僧侶の方よりは、新宗教の人、普段は平服で行動している人の方が気張らずに出せるし、同じ生活者という立場でずっと人と関わっていくところに力点を置いているように思えます。

これはよく金光教で言われていて、私も好きで時々拝借して使わせてもらっている言葉ですけれども、「人生の伴走者」という言葉があります。そのようにして、その人の人生に寄り添って、同じ生活の中で交わりを深めていく中から、新しい宗教民俗がつくられていくことができればと思います。

私自身、全く未熟ながら宗教学者と宗教者の二足のわらじを履いているようなところがあって、今関わっている支縁のまちネットの活動に関わっておりますけれども、自分に何ができるだろうかと、試行錯誤をくりかしながら歩んでいきたいと思っているところです。

○鎌田 ありがとうございます。では、島菌さん。

○島菌 宗教学者が果たす役割と、教団が果たす役割とが似たようなものになってもいい

のではないかなというような感じも持っています。

こういう活動をしていて、非常にやりがいがあるのは、聖的な方たちと会ったり、そういう活動をしているお話を聞けるということが非常にうれしいですね。元気が出てきます。

今日は、近藤さんのような方もそうですし、岩手から「大槌はらんこ」の方も来ていらっしゃるし、土生神社の阪井さんもいらっしゃる、そういうところがあるというのが希望なので、私が話すよりは、サンガ岩手の方と、阪井さんにちょっと話を聞きたいなという気がするんですが、どうでしょう。

○鎌田 ここには、サンガ岩手の方は来ていなくて、私たちが支援として委託販売をしているのです。

○島菌 ああ、サンガ岩手からのものを預かっておられるんですか。

○鎌田 はい。今日はみなさんに販売協力を呼び掛けているんです。では、次に、阪井さんに話をしていただきましょう。阪井さんは、大阪の神社の宮司さんですね。

○阪井 大阪の岸和田にあります、土生神社の宮司の阪井と申します。突然のことで、何を話していいのかわからないんですけども、神社で、いろいろな支援活動と言うのですか、そういうまね事をやっているんですけども、ある福島県の神社の宮司さんが、支援に何が欲しいか聞かれたら、氏子さんが欲しいと。時間がたつにつれてだんだんなくなっていくと。避難もされていかれるということで。

そういう話が伝わっているのですけれども。あまりにも大きな出来事だったんですけども、やっぱり小さなことに心を込めてやっていかないといけないなということが大切だと思われたこと。

福島県から避難されて来られているある青年と出会って、彼が何世代にもわたって避難していかないといけないかもしれないという状況の中で、やっぱり福島県の伝統と言うんですか、地域のことを守っていかないといけないということで、そういう支援を、助けてくれないかということで、ここに集まりまして、福島県のことを勉強して。

関西に避難している方が、地元の伝統をどういうふうにして守っていくのかを考えているということ、そういう取り組みをこれからやっていきたいなと思っています。よろしくお願い致します。

○鎌田 ありがとうございます。それでは最後に、カール・ベッカーさん、こころの未来研究センターを代表して、締め言葉をお願いします。

○カール・ベッカー 恐れ入ります。ご発話なさった方々とお集まりの皆様に御礼を申し上げます。長話しにならないように、コメントを3本柱にまとめます。つまり過去、現在、未来についてです。

過去に関しては、17年前の阪神大震災で同じ打撃を受けても、人が二分されてしまいました。つまり、何も震災から学ばずに、とにかくなかったことにしたい、少しでも早く元通りになりたい、という人と、震災によって自分の価値観や世界観を問い直し、例えば物質や富より人間を大事にしたいという新しい価値を考える人とおられました。その心理的な差は何なのかは分かりませんが、今日の話にも見え隠れしていましたね。

現在に関して言うと、今日の話は大きく分けて、自然悪に対して、人間はどうにもできないときに、鎮魂祭やら、葬儀やら、宗教的儀礼などによって、その運命を何らかのかたちで受け入れられるような話を、鈴木先生は所々なさったかと思います。天災のような自然悪に対して、人間悪というものもあります。人間悪に対して、結束力を持って、よりよい社会を作ろうではないかと、一揆運動を始めとして、色々な世直し思想が幕末などに現れました。つまり自然の運命を宗教的に受容する力と、歪んだ社会を世直し運動で改革する力について学ばせて頂きました。

近未来については、これから臨床宗教士という新しい資格や制度とその教育を考えていくものですが、関西大学のお二人から、非常に重要な示唆を受けたように思います。つまり臨床宗教士の役割と作業が、福祉士や心理士に還元できるものであれば、新制度は要らないというわけなのです。むしろ宗教にしかないもの、例えば死後のことまで視野に入れて、物質だけに還元できない側面をさらに加えられたら、運命を受け入れるような儀礼や祈りの力と、場合によっては、社会を直す力が現れます。こころの問題を脳活動だけに診断しがちな心理学や、社会資源や財政だけに還元しがちな福祉学と違う見方ができるようになればいい、という希望を持って終らせて頂きたいと思います。

どうぞ今後とも宜しくお願い致します。ありがとうございました。

○鎌田　こころの未来研究センターは、倫理学・宗教学のカール・ベッカーさん、認知心理学の吉川左紀子センター長、臨床心理学の河合俊雄さん、脳科学・神経科学の船橋新太郎さんとわたしを入れて5人の教授と、准教授の文化心理学の内田由紀子さん、そして助教・研究員のみなさんとあわせて十数名の小さな所帯ですが、今申し上げたように、脳科学から宗教学まで、本当に多方面に広がりを持ちつつ、「こころ学」の創成という課題を掲げて研究活動を続けています。

そのこころの未来センターの研究活動の一端は、東北大学に今度できるかもしれない実践宗教学講座とかなり内容的につながる部分があると思いますし、島菌さんが東京大学でやっておられる死生学講座とも密接につながっていきます。また、大阪大学の社会貢献の稲場さんのところとか、いろいろなところとつながりを持っています。

こころの未来研究センターは、もちろん、研究センターですから、研究を進めていくということが一つの柱ですけれども、同時に今の時代の中に、どういうソーシャルネットワークやソーシャル・サポート、社会貢献に研究をつないでいくことができるかということも大きな課題となっています。というのも、何と言っても、名前が「こころの未来」ですからね。「未来」に関わる研究センターの大きい役割であり、方向性であると思います。そういう意味で、こういう研究会を継続して、さらに問いを深めながらつながりも深めていくということが必要だと考えております。

そこで、来年度も、年に2回か3回、節目節目に研究集会を開き、その次の問題や、今直近に起こっている課題を確認しつつ議論していきたいと思います。例えば半年後の七月ごろ、この場に玄侑宗久に来てもらいたいと思ってです。半年後、福島ではいったいどういう事態が起こっているのか、再度、現場からの報告と同時に、もう少し理論的なというか、思索的な議論を深めていきたい。その両方を課題として、第3回目、第4回目を来年度に実施したいと考えています。

本日、私は、プリント1枚の挨拶文を用意しました。その裏面に、「無縁社会から有縁社会へ——現代の『エンの行者』の修行とは？」という文章を印刷しております。私は、この「縁の行者」となることを二〇年以上前から公言しているのですが、時代の流れで言うと、「エンの行者」の「エン」は、一九八〇年代お金の「円の行者」たちが日本社会を席卷しました。

でも、これからこの二一世紀は、私が昔から言っている、みんなの「縁」をつなぐ、縁つながりの「縁の行者」こそがこれから本当に必要だと思っています。そういう意味での「縁の行者」でありたいといつも思っています。

私は自分の活動仮題として「世直し」をやりたい。でも、そのとき、「世直し」とはいったい何なのかを深く問いかける必要があります。「世直し」だと思って自己満足に走って、それが逆の「世曲り」をしているというケースもあるからです。

そういうことも含めて、「世直し」のありようを深く問いかけていくことが、世直し思

想をさらに練り直していき、問い直して、鍛え直していくためには必要であると思っています。そのためにも、みなさま方のいろいろなお力をこれからも必要としていますので、今後ともぜひよろしくお願ひしたいと思います。

最後に、私の縁結びの力は法螺貝でしかありませんので、法螺貝演奏で、今日の縁結びを閉じさせていただきます。(法螺貝演奏) みなさま、ほんとうにありがとうございました。お気を付けてお帰りください。

＜当日配布資料「無縁社会から有縁社会へ」 現代の「エンの行者」の修行とは？＞

わたしは、奈良県吉野郡天川村の天河大辨財天社という神仏習合の神社によく参拝に行きます。そこには、役行者が弁財天女を感得して祀ったという伝承が残っています。この修験道の開祖とされる役（エン）の行者に倣ってわたしは20年以上前から「現代のエンの行者」を名乗り始めました。「現代のエンの行者」の「エン」の字には、「役」でも「円」でもなく、「縁」を宛てます。つまり、現代の法力・験力・霊力とは、空を飛んだり、病気を治したりする呪術的な力よりも、個々が持てる力をさらに大きくつなぎ結び相乗させていく「縁結び力」、すなわち「むすびのちから」であるというのがわたしの考えです。

同時にわたしはこの20数年、「現代大中世論」という主張を繰り返してきました。現代は中世のような乱世で、それも中世の規模を拡大再生産したような巨大な乱世であるというのがわたしの見通しでした。最新拙著『現代神道論——霊性と生態智の探究』（春秋社、2011年11月30日刊）では、それを、歴史は直線的に発展ないし変化していくのではなく、螺旋構造的に前代および前々代の課題を隔世遺伝的に延引させ引き継ぎながら拡大再生産していくという「スパイラル史観」として提示しています。

この「現代大中世論」は、“地縁・血縁・知縁・霊縁”という「4つのチ縁」の崩壊現象とそれを踏まえた再建への課題を指しています。地域共同体や家族の絆の希薄化と崩壊。知識や情報の揺らぎと不確定さ。「葬式は要らない」とか「無縁社会」と呼ばれるような先祖祭祀や祖先崇拝などの観念や紐帯や儀礼が意味と力を持たなくなった状況。物質的基盤から霊的・スピリチュアルなつながりまですべてのレベルでチ縁が崩落し、新たな効果的な再建策やグランドデザインを生み出せないでいるのが現状です。

「スパイラル史観」から見ると、古代と近代、中世と現代に共通の問題系が噴出しています。古代と近代の共通項とは、巨大国家の確立、すなわち帝国の時代の到来です。古代帝国と近代国民国家の確立の中で覇権を争い、中央集権的な国家体制の確立を見、植民地支配を含む「帝国化」の過程が進んだのが古代と近代の特性です。

対して、中世と現代には、二重権力や多重権力に分散し、権力と社会体制の混乱が深刻化していきます。日本では、源平の合戦や南北朝の乱や応仁の乱が続き、朝廷・天皇と幕府・征夷大將軍という二重権力体制が進行し、西欧においても十字軍の戦乱により教会と封建諸侯に権力分散していきますが、この時代はまた宗教・霊性・スピリチュアリティが自覚的に捉えられた時代で、日本では一向一揆などが起こり、現代の「パワースポット」ブームにも該当するような蟻の熊野詣や西国三十三ヶ所などの聖地霊場巡りが流行しました。この時代に、「無縁・無常・無情」が時代的キーワードとなっていきます。政治経済や文化面だけでなく、自然そのものが繰り返し猛威を振るい、対策を講じたい疾病が流行します。それが中世的「乱世」の現実でした。

さてここで考えておきたいのは、故網野善彦氏の『無縁・公界・楽——日本中世の自由と平和』（平凡社、1978年）の「無縁」論です。網野氏は、「無縁」概念を「自由」や「公界」と「楽」と絡めつつその積極的肯定的意味を掘り起こしつつ論じ、「無縁」が駆け込み寺や

四条河原など治外法権的なアジールであり、権力的な主従関係や税の取り立てなどから切り離された中世的な「自由と平和」を孕んでいることをポジティブに描き出すことで「暗い」中世像を一新したのでした。その網野的な観点を敷衍するならば、中世社会においてはそれまでの律令体制的な社会的「縁」から「自由」になって「法外」な活動を展開することが可能となります。それは確かに一方では社会秩序の混乱であり戦乱でありアウトローですが、もう一方では活動の「自由」と「新縁の構築」を生み出したわけです。そのような新縁の結び方を提唱したのが葬儀に関わった遁世僧や法然や親鸞や一遍などの念仏層や日蓮や道元らのいわゆる「鎌倉新仏教」や唯一宗源神道を提唱した吉田兼俱でした。

とすれば「無縁」にも、消極的無縁と新しい縁の構築＝新縁結びにつながる創造的・積極的無縁があるということになります。そのような、網野氏が洞察した「自由」と「新縁結び」に連動するような「無縁」の一面もしっかりと見通しつつ、現代の「無縁社会」を捉え直し、これからの社会構想を考えなければならないと考えます。これまでの悪しき縁やしがらみから「自由」になって新しい社会づくりを志す人びとは最初「悪党」視されますが、そのような「悪党」こそが新しい時代の「世直し」の担い手にもなり得るという「無縁社会論」のパラドキシカルな全体構造を見据えつつ、「絆」や「つながり」や「有縁」のありようを構想したいと考えています。(鎌田東二記)